
IS～力は何のために～

寒村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〓 力は何のために〓

【Nコード】

N8096R

【作者名】

寒村

【あらすじ】

男所帯で育った女の子（男子っぽい）がIS学園へ！

男が一夏だけってのをくずしたくないけど男を入りたいな、と思つた結果こうなった。後悔はしていない。

タイトルはあんまり気にしないでください。

なにかあったら感想でお願いします。

3／27 五話と七話修正しました。

学校生活始まったうえに色々と修正しようと思うので更新一気に遅くなると思います。

プロローグ

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

教壇の前に立って挨拶しているのは、一年一組の副担任らしい。名前はさっき自己紹介してたな。山田麻耶先生。

上から読んでも下から読んでもヤマダマヤ。覚えやす…いのか？髪はショートで緑。メガネをかけているんだけど…ちよつとでかいらしく、さっきから結構ずれそうになっている。

服も結構…その、何だ。よく言えばゆとりがある、悪く言えばだぼだぼだから本人が小さいような印象を受けてしまう。

でもなー、男子視点で悪いんだけどさ、このクラスおかしいだろ。

いくらなんでも美人さん多すぎじゃねーのか？

…しかもクラスのほとんどが女子だし。

「それでは皆さん、一年間よろしく願いますね」

クラスの『ほとんど』が女子ってことは少なからず男子はいるわけ
で――

「……………」

クラスの意識の大半はその人物に注がれている。

へんじがない。ただのくらすめいとのようなだ。…てか？

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

やまや先生（オレはこう呼ぶことに決めた）は沈黙にうろたえなが

らも話を進めようとする。

自己紹介：ねえ？オレは雑賀だから真ん中くらいかな？
えー…と、出席番号一番は相川さんか。ふんふん。

っで。

「――はい。それじゃあ次は織斑くん、お願いします」

ついにうちのクラス全員の注目を集めるであろう『男』の自己紹介の番が来た。

今までそわそわしているだけだったクラス内の空気が、一瞬で張り詰めたものになる。

かく言うオレも気になっているうちの一人だ。だって、当たり前だろう？

これから一年をともに過ごすクラスメイトで隣の席。そして世界で『唯一の男性IS操縦者』なんだから。

「織斑くん？」

それにしても呼ばれてるのに気づいてないんかねあいつは。クラス中こんな空気だったのに、何考えてんだか。

「織斑くん。織斑くん。織斑一夏くんっ！」

「は、はいっ!？」

大声を出されてやっと気づいて、驚きのあまり返事が裏声になっている。

こいつが、この学園『唯一』の男子生徒、織斑一夏。

顔立ちは一般的に言うイケメン。黒髪黒目、すらっとした体でありながら、おそらくはちゃんと使う用の筋肉がついている。いわゆる細マッチョ。

そしてイケメン。大事な事なので二回言いました。

そう、この織斑一夏という奴は女子だけの学園に一人入学イケメンという…
…ようはラノベの主人公みたいな状況の奴なのだ。

あれか。

※ただしイケメンに限る。なのかISでさえ。

世の男に本人のあずかり知らぬところで『モゲロモゲロ』と呪われているだろう。オレはしないが。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！」

でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

今の女尊男卑の世の中で男にこういう態度を取ってくれる女性はどうちかってーと少数派なんじゃないかなーか。

女子に対しても心の優しい、いい先生なんだろうなー。いやはや、よかったよかった。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っというか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

やまや先生は安心したのか嬉しいのか織斑に熱心に詰め寄る。

………いい、いや別にそこまで言わなくても大丈夫だと思いますよー…？

まあ、ようやく織斑の自己紹介が始まるみたいだ。ちゃんと聞こう。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願いします」

ふんふん。名前は多分、いや絶対言わなくても全員知ってる。

クラス内の皆知りたいのはおそらく好きな食べ物嫌いな食べ物趣味特技etc etcそういうことだろう。

皆が『まさか、それで終わりじゃないよね？』とばかりに次の言葉を気にしていっそう空気が鋭くなる。

シュパッ

あれ？まさか、本当にこれだけ？

い、いやまさかそんなことは――

「以上です」

以上なのかよっ!!

クラス内はズコーとリアクションをとっているものやガタンっとな
っこけているものに溢れていた。

「あ、あのー……」

やまや先生も戸惑ってるじゃないか織斑。もっとちゃんと自己紹介
しろよー!!

根暗と思われるぞ!

：あれ?　そういうやさっき人入ってこなかったか?

今リアクションで机に突っ伏してて見えないんだけど

パアンッ!　パアン!

「いっ――!?!」　「ったあ――!?!」

突っ伏していた顔を上げようとしたところを、何か硬い板のような
もので叩かれた。

しかも上げようとした丁度そのときだから額にジャストミート。
うおおおおお……じいちゃんの拳骨よりかマシだけど結構いてえ
…。

頭を押さえながら顔を上げると

「げえっ、関羽!?!」

パン！

織斑が余計なことを言って更に叩かれていた。
いや、なぜに関羽。ってか三国志読んでんのか織斑よ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。」

そして生徒に躊躇い無く馬鹿者というこの女性は何者。いや、織斑千冬か。しかし…うわあ…この人絶対どSだあ…。ってか何でオレはさっき叩かれたんだ…？

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな。」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと…」

ちょっとアブナイくらいの顔でやまや先生が話している。え…まさかこの人百合派の人なのか…？

ってかうわあっ！担任だった！多分この人担任だ！やまや先生が織斑先生って言ってたし！

と、そんなことを考えていると、織斑先生が口を開いた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。」

私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

わお…。何たるお言葉。オレは若干引かせていただきました…弱冠なだけに…。

『逆らってもいいが、私の言うことは聞け。』ってどういふことだよ…！オレにはわからないよ…！
そして一人で頭を抱えていると

「キャーキャー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から」

教室中から黄色い悲鳴（いや、歓声か…？）が飛んできた。

ああ、そういえばオレは『すげーなこの人』くらいにしか思っ
てないから忘れてたけど、この人めっちゃ人気あるんだっけ…。

中学のとき同じクラスの女子がブロマイドもってはしゃいでたな…。

「あの千冬様にご指導してただけるなんて幸せです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

早まるな、早まるんじゃないその女子…！はあ…なんか疲れてき
たな…。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられ
る。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか
？」

織斑先生は本気でうざがっている顔で言い放った。

……人気あるの気づいてねえんだ、この人。自分が人気だからこん
な状態になってるのに気づいてねえんだ…。

でもさ、もうちょい優しい言葉をかけてやってもいいんじゃないん
だろうか。生徒だぞ。

とか思っていたのだが、オレは甘かったらしい。金平糖よりも、カ

ルメ焼きよりも、綿菓子よりも。

「きゃあああああっ！お姉様！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躑をして〜！」

あーはいはい。今日も良い天気だなー。青空が広がってるぜー。

「で？挨拶も満足に出来んのかお前は」

「いや、千冬姉、俺は――」

パン！

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

ああ、織斑って織斑先生の弟だったのか。珍しい苗字だからまさかとは思ってたんだけど。

クラス内のほかの女子もそれに気づいたのか、ざわめきが広がる。

「え……織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で唯一男でISを使えるって言うのも、それが関係して……」

「ああっ、いいなあ、代わってほしいなあっ」

多分、代わったらただのパシリになるぞ。……ああ、あいつはそれでいいのか。それで本望なのか。

と、油断していたのが悪かったのか。

織斑先生は突然オレのほうを向いて言った。

「…それと、自己紹介の途中に関らず教壇の真ん前で寝るんじゃない。そのの、雑賀といったか」

ああなるほど、突っ伏してたのが悪かったから叩かれたんだ。寝てたわけじゃないんだけどなあ…。
ま、一応謝っとう。

「はい、すみませんでした、織斑先生。以後気をつけます」
「ああ、わかったなら良い」

そう言っって、織斑先生はオレから視線をはずした。
おお、叩かれなくてすんだみたいだ。よかったよかった。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らには、これからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。
いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

鬼だ。じいちゃん並に鬼だ。鬼教師だこの人。やまや先生と足して2で割ることを要求する。

……まさかだからやまや先生が副担なのかつ!?

そして

「席に着け、馬鹿者」

自己紹介の途中で実姉がやってきて座るタイミングをつかめなかった織斑は、再び馬鹿者呼ばわりされて座っていった。

ああ、そうだ。オレの自己紹介をしよう。

雑賀玲衣蘭^{さいがれいら}。15歳。赤髪に緑眼なんてなりしてるが、純日本人だ。男兄弟が多いから、口調も趣味も男っぽくてすまないが、まあこれから一年よろしくしてほしい。

座右の銘は『敢為邁往』。目標は誰よりも強くなること。

あと、日本代表候補で、専用機を持ってる。

ああ、言い忘れてた。俺の名前DONネームっぽいかいった奴は表へ出る。オレが直々にぶっ飛ばしてやる。

以上だ。

なんてな。

プロローグ（後書き）

「敢為邁往」
かんいまいおう

意味は「目的に向かって困難をもともせず、自ら思い切って、まっしぐらに進んで行くこと。」

一話

パン！

「とつとと席に着け、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

織斑姉弟のそんなやり取りから、二時間目が始まった。

え？ 一時間目？ うーん、隣で織斑がなんか

なんもわかりませんorz

見たいな顔してたくらいしか印象にないなあ…。

最初の授業ってIS基礎理論だからまともにあの本みてりゃあ何もわかんねえってことはないと思うんだけど…。

休み時間は休み時間で授業中寝ないように爆睡してたら終わってたしなあ。

先生が織斑叩いた音で起きた。あぶねえあぶねえ。ってかチャイムで起きないでアレで起きるってどういうことだオレ。

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

すらすらとやまや先生が教科書の内容を読み、説明して行く。

ふんふん。まあこの辺は一応代表候補生なんでがっちり頭に突っ込まれてるんだ、が。

とりあえず授業態度というものもあるから授業を真面目に聞いている

る（フリをしている）。あと、ノート提出とかあったときのためにノートもちゃんと取っている。

そして右隣の席である織斑一夏はというと

額に皺を寄せ教科書を睨んでいる。どうやらなにもわからないようだ。

微妙に汗かいてるしな。この冷暖房完備の教室で。

面白いから授業を聞きながら途中途中織斑をチラ見していると

「……………」

「……………」

織斑と目が合った。

何も言わず見詰め合っているのは気まずいから声を出す。

「…なんか用か」

「い、いや。なんでもないんだ。ゴメン」

そういつてまた教科書とにらめっこを始めた織斑。

まあとりあえず今オレがこいつに言えるのは

「とりあえず板書はしたほうがいいんじゃないのか？ 織斑」
「！…ありがとう」

その言葉にはっとしたかのようにノートを取り出す織斑。
おいおいせめてノートくらいは出しとけよな。

そして、今のやり取りに気づいたやまや先生が織斑に声をかける。

「何かわからないところはありますか？」

やっと先生らしいところを見せれると思ったのか、えっへんとも言いたげに胸を張って織斑に問いかける。

織斑はその言葉に少し考えるようなそぶりを見せてから声を上げる。

「先生！」

「はい！何ですか織斑君！」

「ほとんど全部わかりません」

「ぶはっ」

織斑はキリッと効果音がつきそうなくらいに言い切った。

因みに最後の笑いはオレ。いや、隣でそんなことやってたら笑うだろ普通に考えて。

うわっ！今織斑先生に睨まれた…。おお恐い。自重しよう。

ってかやっぱり全部わかんなかったんだなあいつ。あ、いやほとんど全部か。

「ぜ、全部…ですか…？えっと、織斑君以外で今段階でわからないところのある人はいますか…？」

教室の何処からも、手は上がらない。当然だな。今の段階は正直あの意味がわからんくらい分厚い例の必読の本に書いてあった。

IS学園に入学するやつは、その本の中に書いてあることなんて当たり前のように覚えている代表候補生と、とんでもない倍率の試験を突破できるほどの勤勉な者達だ。

入学前に配られた参考書の内容は一通り目を通して覚えているんだ

ろう。

で、織斑は覚えてない…と。いや、せめて読んではいると思うんだけどな…？必読って書いてあったし。

「…：織斑。入学前に配られた参考書は読んだか？」

織斑先生の問いに対しての織斑の答えは

「古い電話帳と間違えて捨てました」
パァン！

「必読と書いてあったらう馬鹿者」

「くくっ…やっぱ織斑面白っははは」
パァン！

「授業中に笑うな雑賀」

「…はい。すみませんでした」

二回目くらいしましたー。いてえ。いごきをつけます。

織斑がわりいんだ織斑が。あいつギャグセン高すぎだろ！

その後、織斑は織斑先生に一週間以内にあの本の内容を覚えてくるように言われていた。

そんなことがあった授業の後の休み時間。

15分の学生の息抜き時間。

織斑とでも話してみっかな。

「おい、織斑あつ！お前が笑わすからオレまでアレ食らっただろおが！」

「ええっ！？アレ俺のせいなのかっ！？」

「いや、違う」

「違うのかよっ！」

すかさず突っ込みを入れてくれた織斑。いい奴だな。うん。

お、そうだ。そういやこっちが一方的に知ってる状態だったな。

「ああ、織斑。オレは雑賀玲衣蘭。まあ、雑賀とかレイとか呼んでくれ。個人的にはレイがお勧めだ」

玲衣蘭^{れいら}ってなんかさ、恥ずかしいじゃんか。女っぽいし、漢字がアレっぽいし。

「ん？ああ、じゃあ遠慮なくレイって呼ぶよ。俺のことは一夏って呼んでくれ。千冬姉とかぶるし」

「おお。んじゃ遠慮なく。一夏、これからよろしく。」

そういつて、オレは一夏に手を差し出す。うん。やっぱこいついい奴だな。

「こちらこそ、よろしく。それにしても…なんか、言っているのかわかんないけどさ、レイって男っぽいんだな」

そういつて手を握り返す一夏。
ってかそこ突っ込んでくるか。

「兄弟とかが男ばっかだったからな。わりいか？」

「いや、逆に安心したよ。こう、男子と話してるみたいで落ち着く」

心底安心したように息を吐きながら、言う一夏。

…まあそうだろうな…。女の中にぽつんだモンな。きついよなそりや。

そうして、オレが一夏と話を続けようと思って口を開きかけたところで、

「ちょっと、よろしくて？」

第三者の声が、入ってきた。

二話

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」「あ？」

一夏とオレが話をしていると、金髪蒼眼の、その：『いかにも』というオーラを発する女子に割り込みをかけられた。とりあえず、どっちに話しかけてんだかわかんねえな。いや、一夏だろうけど。

「あゝ、どっちに用事がある。オレか？一夏か？」

「男のほうですわ！」

ほら、やっぱり一夏だ。

「ああ、俺か。なんの用だ？」

この女子、アレだな。ISの弊害的な女尊男卑を絶対だと考えてるような奴だ。オレ苦手なんだよなこういうの。

オレ、男友達いっぱいいたからさ。そんな上下感じてないっていうか、やっぱ力とかだと男の強いところあるしなー。

だから、こういう対応する女子は基本的に好きじゃない。

「まあ！なんですよ、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

……いや、まあこういうタイプ見たことはあったんだけどさ。ここまでひどいの見たこと無かったわ。
すげえなこいつ。『男は全員女の家来』みたいな思考回路してんのか？

IS乗れるってだけでこんなになるんかねえ、人は。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし。」

おお、一夏謝るんだそこで。心広いほうだな。オレの知り合い達は基本この言われようだともうこいつ殴ってんじゃねーかな。

……オレの知り合いに短気なのが多いのかもしれない。あんなだったし。

だけど、一夏の心の広さに反して、こいつの心は予想外に狭かったみてえだ。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、IS学園の入試主席のこのわたくしを！？」

そう、目を吊り上げ、いかにも男を見下した口調でこいつは言い放った。

へー、こいつセシリア……お、オルカット？ま、まあいいや。セシリアっていうのかこいつ。

んでイギリスの代表候補生で入試主席……と。専用機は持っていると考えていいな。

「なあ、代表候補生ってなんだ？」

「…ハァ！？一夏それマジでいつてんのか！？」

「え…そ、そうだけど…？」

あまりのことに二人の会話に乱入してしまった。一夏は冗談でもな
んでもなく、本気でわかっていない模様。
うっわあ……。さっきの授業ほとんどじゃなくて本当は全部かん
なかつたんじゃないのか？

「はあ……。一夏、I Sの『イギリス代表』の『候補生』だ。言葉の
意味から分かれ。馬鹿。」

「おお、そう言われれば確かにそうだな」

ほんとに大丈夫なのかこいつは。この学校でやっていけるのか？

「はあ：極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常
識ですわよ、常識」

「一応言っておくが、このクラス内にいる日本人でここまで分かっ
てないのこいつだけだからな」

一夏一人のせいで日本を馬鹿にされちゃたまらんからな。一応訂正
を入れておく。

「本来、わたくしのようなエリートとは、クラスを共にするだけで
も幸運なのですわよ？そこのところを分かってらっしゃるのかしら」

無視された上に更なる暴言。織斑先生並みの自分理論をもってらっ
しゃるようで。

ってか、どっちかってーと世界で唯一の男性I S操縦者と同じクラ
スになれたほうがずいぶんと幸運だと思うんだが……。そこのところ
を分かってらっしゃるのかしら（笑）

「そうか、それはラッキーだ。」

「……馬鹿にしていますの？」

そんな棒読みじゃそいつは納得しないぞ一夏。

「それにしても、唯一の男性I S操縦者というのですから、少しくらい知性を感じられるかと思っていたのですが…期待はずれですね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

本気で困ったような顔で一夏は自身の心情を吐露する。

政府とかに勝手に入れられただけだろうしな、この学園に入ったのだって。かわいそうな奴だ。

「ふん、まあでも？わたくしは優秀ですから？あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ？何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一を強調しまくったなこいつ。あ、そうだ電子辞書は…と、『優しい…他人に対して思いやりがあり、情がこまやかである。』…か。そうだよな、優しいって言葉は、オレの認識で正しいんだよな。

「I Sを動かすやつなら、俺も倒したぞ？教官」

「え？一夏マジでか。オレ相打ちで終わったんだけど」

「いや、アレを倒したって言っているのかわかんないんだけどさ」

うわー…一夏に負けた…。なんかショックだ…。やまや先生マジで強かったのに…。

ただ、近くにオレ以上にショックを受けていたやつがいる。セシリアだ。固まってやがる。

「わ、わたくし فقطと聞きましたが…？」

「※ただし女に限る。とか付いてなかったか？」
「知りませんわよっ！」

おお、いい突っ込みだ。こいつ根はいいやつなのかもしれん。

「つ、つまりわたくしだけではない、と？」

「いや、知らないけど」

「そこのあなた！」

「雑賀玲衣蘭だ。」

「…雑賀さんも相打ちとはいえ、教官を倒した…と？」

そんなに唯一、にこだわるんかねえこいつは。

「いや、やまや先生に相打ちってすごいのかな」

「えーと、まあなんだ。落ち着けよ。な？」

「これが落ち着いていられ——」

キーンコーンカーンコーン

オレたちの話をさえぎり、チャイムが鳴った。思うんだけどさ、このチャイムの音だけやけにレトロだよなこの学校。
そして

「また後で来ますわ！覚えておきなさい！」

三下みたいな台詞を吐いて、セシリアは自分の席へ帰っていった。

それと入れ違いにシュパッとドアが開き、織斑先生とやまや先生が入ってくる。

「全員、席に着け。」

俺の席はすぐ近くだから、すでに座り終わっている。

「この時間は授業を始める前に、再来週のクラス対抗戦に出場する生徒を決める。まあ要するに、クラス長決めだ。」

おお、確かに決めてなかったな。クラス長。一夏とかなんねえかなー？面白そうだ。

オレ？オレはなる気は無いぞ。やりたいことあるしな。

「自薦他薦は問わん。誰かいなか？」

自薦他薦問わないのか…。じゃあ、一夏でも推薦しようかなー

と思い、手を上げようとしたところで――

「はい！織斑君を推薦します！」

先を越された。…ま、いいや。

「オレもそれがいいと思いまーす」

「レイ！？」

ははははー！大人しくクラス長にでもなってる一夏ー！

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

今まで大人しくしていたから了承していたと思っていたんだが、そ

うじゃなかったようで慌てて一夏が立ち上がる。

「お、俺!？」

おう、お前だ。お前以外に織斑なんて先生だけだろうが。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか? いないなら無投票当選だぞ」

「ちょ、ちょっと待った! 俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権はない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

よしよし。がんばれ一夏! オレは応援してるぞクラス長——!

「ぐっ…だ、だったら! 俺は雑賀玲衣蘭さんを推薦します!」

「ハァ——!!? 何してくれてんだお前!!」

「お、俺だってやりたくないんだよっ!!」

クソッ…まさかこんな隣に伏兵がいるとは…! ま、投票になったら確実に一夏に票集まるから別にいいか。

「な、なんだよレイ。そんな余裕そうな顔して」

「一夏お前、投票になってオレが選ばれるとでも思ってたのか?」

と、オレがニヤリと笑って見せると、そこでやっと気づいたらしく『はっ…!?!』というような顔になる一夏。

ははは、ざまあ。クラス長にでもなってる。

そして、懲りずに反論をしようとした一夏の声をを、突然甲高い声が遮った。

バンッと机を叩いて立ち上がったのは、あいつ。あのセシリア……オルカット。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

あ、オルコットだった。オルカット違ったのか。

ま、別にお前以外は誰もそんなこと思っちゃいないがな。恥さらしとも思わないし。

「実力から言えばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国でIS技術の修練に来ているのであって、サークスをする気は毛頭ございませんわ！」

極東の猿って、一夏だけ……だよな。うん、日本男児全部入ってるわけじゃないよなきつと。オレのじいちゃんや仲間達は入ってないない。

あー、でもイギリスも島国だよな。国土も広いつて傲慢できるほどじゃないくらいの。そこんどこどう考えてんだろ。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

……まあやまや先生倒したんだったらそうだよなあ……。ってか結構キてるなオレ。実は恥ずかしいからあんまり周りに言ったりしないけど、オレ自分のいるところって基本大好きなんだよな。

国然り、家然り、学校然り。だから次オレの国になんか言われたら

「大体、文化としても更新的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で・・・」

ぷっん

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ？世界一まずい料理で何年覇者だよ？」

「はっ！頭凝り固まった末にうなぎをゼリーで寄せるような国が何を言ってるやがる」

あ。

やっちまった。うわー、面倒事の予感がする。

「あっ、あっ、あなた方！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

お前が先に日本侮辱したんだろおが。そこんところは許せん。

あんな食文化してる国のやつが、日本に勝てると思ってるのか。練り切り見ってから出直してきやがれてんだ。

「決闘ですわ！」

……こうなるよなー。うん、大体予想は出来てたんだ。

……まあ、いい。負ける気はしない。勝ったらクラス長の座を一夏にまわせばいいんだし、勝ってもいいはずだ。

いや、『勝たなくてはならない』。

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい。」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い・

・いえ、奴隷にしますわよ!？」

「はっ!出来るモンならやってみやがれ。ぼろっぼろにしてやるよ」

「あ、あなたねえ……!!」

とにかく、こいつには負けねえ。絶対に勝ってやるよ。

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない。」

「それを聞いて安心しましたわ」

へえ。一夏も言うじゃんか。わざと負けるとかしたらオレがとりあえず一発ぶん殴るけどな。

「それで、ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら? まあ、イギリス代表候補生であるわたくしと戦うのですから、それくらいは——」

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

と、そこまで言ったところで、クラスは笑いの渦に包まれた。
はあ……流石一夏。ギャグセンが高いな……。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、10年以上前の話だよ？」

「織斑君はIS使えるかもしれないけど、それは言いすぎだよ」

「やめとけ、一夏。肉弾戦ならまだ希望はあるが、これからやるのはIS戦だ」

ISを使用可の戦争を男VS女でやったら、男が三日で全滅するよ
うな世の中になってしまったんだ。今は。

ま、一夏はほぼ初乗りでやまや先生倒せるくらいだから大丈夫：だ
と思うんだがなあ：？

これ以上言っても無駄なら仕方ないと思い、その後オレは無言で話
の收拾を待った。

「・・・じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうとも。むしろ、わたくしがハンデをつけなく
ていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、日本の男子はジョークセン
スがありますのね」

セシリアの顔に浮かぶのは、明らかな嘲笑。

「織斑くん、今から遅くないよ？セシリアに言って、ハンデを付け
てもらったら？」

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはいらない」

一夏の顔に浮かぶのは、男の維持。

「えー？それは代表候補生をなめすぎだよ。それとも、ISは稼
働時間がものを言うんだよー？」

一夏は、なめてなんかない。男には、やっぱり誰でも維持があるもんだ。

「……話は決まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、オルコット、雑賀はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

とりあえず、今は一旦授業を聞くことにしよう。話は、きっとそれからだ。

三話

「うう……。い、意味が分からん……。なんでこんなにややこしいんだ……。？」

「とりあえず暗記しとけ。話はそれからだ」

一夏は結局専門用語の羅列についていけなかったようだ。

ま、覚えなきゃ始まんないからな。がんばれや。

そんなことを言いながら、オレは教室を出て行く。

「ああっ！レイ、そうだ。頼む！いろいろ教えてくれ！」

一夏がひらめいた！ばかりに両手を合わせて言う。

ああー、教えてやりたいのは山々なんだが……

「すまん。オレ、これから用事がある。篠ノ之って幼馴染なんだろう？アイツに教えて貰っとけ」

そう、休み時間や授業中などで見ていて分かったんだが、篠ノ之は一夏の幼馴染。そして

一夏に惚れてるな、ありやあ。

そうと分かっちゃあオレがでしゃばるわけにもいかんだろう。

ま、用事あるってのは本当なだけだな。

じゃーな、と手を振りながらオレは今度こそ教室を出て行くのだっ

た。

教室を出たオレが向かったのは

「たのもおーー！！！！この『空手部』で、一番強いやつは誰だあ
っ！！！」

空手部道場。

今から、オレはこの学校にある格闘系の部活すべてに道場破りならぬ部活破りをしに行くのだ。

あ？理由？そんなん決まってるだろ。

『最強』を目指すからだ。

side 生徒会長

「部活破り？」

「はい、何でも格闘系の部活に乱入しては、『一番強い者を出せ』
と言って勝負を挑み、悉く勝利していく一年生が出たようで……」

一体その子は何を考えているのでしょうか…。
そう言いながら頭を抱えるのは、私の幼馴染の布仏虚。
何を考えているのか…ねえ？

「お嬢様は分かりますか？」

「あん、お嬢様はやめてっていつも言ってるでしょう？ 楯無って呼んで？」

「失礼しました、ついクセで。それで、分かりますか？」

んー…そうねえ。『一番強い者を出せ』…ね。

「そうね、分かるわ。多分、そのこの方からそろそろこっちに来るんじゃないかしら」

「え？ 何ですか？」

「だって、その子は『最強』を目指しているんだもの。」

だったら、私はその子と戦うことになる。

だってそうでしょう？ その子が目指しているのは『最強』。
今、この『更識楯無』がいる場所なんだから。

「ふふっ今年は、血気盛んな子が多いのかしら？」

そう、私が言葉を発した丁度そのとき

プシュッ

「あんたがここの『最強』だな。オレと戦え」

《すべての生徒の長は、『最強』でなくてはならない。》

生徒会長。それはここIS学園の最強の称号。

オレは、自身が『最強』を目指す者であるため、いずれは超えねばならぬ壁として、そいつに勝負を挑みに来た。

別に、今すぐ勝てるとは思わない。ただ、それでも勝ちたい。負けるのは嫌だ。『雑賀』の名を負う者として、オレは『最強』でなくてはならない。

だから

「あんたがここの『最強』だな。オレと戦え」

勝負を、挑んだ。

生徒会室の中で、唯一座っている者——あの、薄い蒼の髪をしたやつ——が恐らく、いや確実に生徒会長だろう。なにせ他の二人とはオーラが違う。

「あれー？ レイちゃんだー？ やっほー？」

…うん？生徒会に知ってるやつはいないは……ず……？
と思っ、声のしたほうを向くとそこには

「やや、さっきぶり」

1年1組在籍、本名不明。（仮称のほほん）。地味に目立つ、袖の
だぼだぼしていた奴がいた。

「あら、本音。もしかしてその子と知り合いなのかしら？」

「同じクラスだよ」

「あら、そう」

あ、名前本音って言うんだ。初めて知った。

…なんかこいついると空気が抜けるな。緊張感が出せない…！

「ところで、あなたが『部活破り』の犯人かしら？」

「ああ、そうだよ。」

おお、緊張感戻ってきたぞ。よかった。

「オレは、『最強』を目指す。だから、戦え」

そうだ。オレは『最強』にならなくてはならない。

「それは、あなたが『雑賀』であるが故かしら？ねえ、日本の代表
候補生でありながら、日本最大の極道『雑賀組』の次期組長、雑賀
玲衣蘭さん？」

「っ！！？何で知ってる！？」

そういうことは何にも、まだ誰にも話していない。どこから情報が

漏れた。

：ああ、そうだ。オレは、オレについて来てくれる奴らに『最強』の姿を見せなくちゃならねえ。

組長が、自分達のトップが、『最強』じゃないなんて嫌だろう？

「っは。とりあえず何で知ってんのかは置いとく。」

「そんなに、戦いたい？」

「たりめーだ。」

生徒会長——聞いた話によると更識楯無って名前らしい——はため息をつきながらも椅子から立ち口を開く。

「じゃあ何で戦う？ IS？ 格闘？ 料理？」

「料理ってなんだよ……。選ばせてくれんのか？ ……じゃあ格闘しようぜ、格闘。」

あちらさんは、相当自分の力に自信が{o}ありのようだ。

ただ、ISではなく格闘なら。

オレだって、自分の力に自信は持っている。

その思いを、オレは口に出すことはせずに、ただ口元に笑みを浮かべた——

その後、オレ達は生徒会長のそばにいた三年生（布仏虚さんって言
うらしい。本音の姉だとか）の提案により、白胴着に紺袴という日
本の武芸者スタイルに着替えてから道場に向かった。

「じゃあ、いつでもかかってきていいわよ？」

うおおお余裕だな：！扇子持ってやがる・・・。

でも、きっとその自信に見合うだけの力を持ち、それを手に入れる
ために努力を怠らない人だ。

今も、ほら。隙だらけに見えて、その実まったく隙が無い。今まで
の部活の最強者なんて、こいつにかかれば一瞬で倒される。

全力でいく。

何せ、こちらは挑戦者なんだからな。

距離は、大体7メートルくらいだろうか。

「…いくぞ。」

膝の力を抜き、倒れるように、重心を前へ。そのまま重力を利用し、
地面にするように最速で近づくっ！
そして”そのまま”拳を突き出す。

パンツ！

「……驚いたわ。流石『雑賀』と言ったところかしら？その年でそこまでの『縮地』と『無拍子』を使うなんて。とっさに手を出すので精一杯」

「っは。どうせ、あんたも使えんだろうがよ」

「あら？ばれちゃった？あーあ、せっかく掴めたから投げようと思っただのに。」

「そう簡単に投げられて堪るかッてんだ」

初撃、オレもじいちゃんとか一部の達人にしか防がれたことの無いこの『縮地』からの『無拍子の打撃』。

オレ渾身の右ストレート。

それは、更識楯無の右手に収まっていた。しかも収まった瞬間にこの人は、足をかけて投げようとしてきやがった。

それにしても、これを完璧に防ぐか…！

「じゃあ、今度はこっちから行くわね？」

…結構厳しいな、こりゃあ。

その後、20分に渡り、オレは更識楯無と戦っていた。

「はあっ…！はあっ…」

「…あは、私も…息、切れてきちゃってる、わね…。」

「っは…ほざいてろ…はあっ…」

もう20分も戦っているのだ。双方体力は最初よりも随分と減っている。汗だつてだらだらだ。

ただ、オレは終始攻めに徹しようとして動き回っていたから、楯無よりも体力の消耗が激しい。

集中力も切れてきた。

恐らく、次の一手が最後。全力を、出し切る。

一度体勢を直し、向き合う。

最初と同じ手。縮地からの無拍子の打撃。ただ今度は左で打つ。

最初と同じように、アイツは右手でオレの手をつかみ、足をかけ、投げようとする。

オレは、足を踏ん張ってそれに耐え体を回転させ、アイツの体の右側へ体を回転させ、わき腹に手をつける。

そしてそこから寸勁すんけいをアイツに食らわせ——

こ、ここは何処だ…？オレは…寝てた…いや、気絶してたのか。
ってか眩しいなここ。あー、でも眠い。なんか知らんけど頭の下に
いい感じの枕あるしもうこのまま寝てよっかなー……

「んう………」

「あら、やっとお目覚めみたいね」

その言葉で、一気に思い出した。そして、目が覚めた。
開いた目に映ったのは――

「更識…楯無…？」

ってかこの人も結構厨二っぽい名前してるよなあ…。

「それは、代々受け継がれる名前だから仕方ないの。海老○みたいな
なものよ」

ん？ああそりゃあ仕方ないっすね……。

あれ？何でこの人がいるんだ？え？あ、ま、まさかっ……！？

「う、うわあっ！！？」

ゴロゴロと転がりながらその場を退避し、回転の勢いを利用して立ち上がる。

あ？何でそんなことしたんだって？

「な、何で膝枕なんてしてんだあんたはっ！！？」

そのまま起き上がったらおでことおでこがガッツンコする可能性が

あんだろおがつ!!

「えー、だって玲衣蘭ちゃんあのまま気絶しちゃったんだもの。ねえ?」

「なんでそこから膝枕に繋がったんだっ!」

頭を抱えながらオレは突っ込みを入れる。分からん。この人が分からん!!

「まあいいわ。玲衣蘭ちゃん」

「レイって呼んでくれ」

「じゃあれいちゃん」

「……好きにしてくれ」

はあ…この人疲れる。すっごい疲れる。

「生徒会副会長になってもらうけどいいわよね?」

「は……?」

「ま、詳しいことはまた明日ね。明日授業が終わったら、また生徒会室にして頂戴?」

「お、おう」

あ…ありのまま 今 起こった話を話すぜ!

『オレは奴に格闘戦で負けて気絶したと思っていたらいつの間にか生徒副会長になっていた』

な…何を言っているのかわからねーと思うが

オレも何をされたのかわからなかった…

頭がどうにかなりそうだった…ISだとかクラス長だとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

その後、オレはそんな混乱した頭のまま、アリーナのシャワー室で汗を流し、袴から制服に着替えて寮に戻ったのだった。

そういや、オレ同じ部屋の奴しらねえな。

side 楯無

危ないところだったわね。本当。

最初と同じだと思って、油断したのが悪かった。

私はあの寸勁をくらい、少し身体が浮くほどの衝撃を受けた。
でも、あの子はそこで意識がもう途切れていて。

その後、虚に介抱させたんだけど、流石に時間が遅くなってきたからあの子は部屋に戻らせて私があの子を見ていた。

日本最大の極道の、次期組長。味方につけられたら、この国の中では心強いなんてもんじゃない。

それに、織斑一夏と同じクラスで、専用機持ち。どうにか、引き込みたい。彼女に、手伝いを頼みたいのだ。

流石に、彼を見ているのが本音だけでは心細いから。

彼女は、受け入れてくれるだろうか。いや、受け入れさせてみせる。

「ふふっ、これから楽しくなりそうな気がするわね」

心のそこから湧き上がったものを隠すことなど、出来なかった――

四話

アリーナのシャワー室で軽く汗を流し、制服に着替えてから寮に向かった。

更識楯無と戦った後で、関節が酷く痛む中での移動だったから、普通に歩いているより少し動きがのろかったかもしれない。

オレの部屋はえー…と、『1026室』か。

そういえば、オレと同室の人って誰だ？

と考えながら歩いていると、オレの部屋…の隣の部屋の入り口に人だかりが出来ていた。

なんだあ？ありゃあ。ま、気になるっちゃあ気になるし、見てみるか。

痛む体が『とつとと部屋入って寝ろって言ってんだよコノヤロー！』と叫んでくるが無視する。

人だかりを掻き分けて入ったその先には――

「……一夏？」

「れ、レイー！！助けてくれ！！」

何故か穴の開いているドアの前で、情けなくしりもちをついている織斑一夏がいた。

「いや、どういう状況かわかんねえんだけど…」

「そ、それは説明すると長くなるんだけど……」

「ああ、じゃあいい。とりあえず、ここは部屋でいいんだな？」

一夏は、「お、おう。一応」とうなずく。

とつとと済むといいんだけどな。周りの女子の目もなんか刺さってくるし。痛い、痛いぞおお…。

「あー、一夏の同室のやつ。中にいるんだろ？」

「……なんだ」

この声、篠ノ之か。はーん、分かった。分かったぞオレは。

『謎は、全て解けた！』の気分だ。

アレだな。一夏がラッキースケベイベントを起こして、篠ノ之が恥ずかしさのあまり木刀を振り上げてきたのを一夏が部屋の外に避難。篠ノ之はドアごと木刀でめったざしにかかる…ってとこか。

ふんふん。一夏。お前はほんとと何処の主人公だ。

「ああー…篠ノ之。お気持ち察するが…このままだと一夏が他の女子に獲られるぞ（誤字にあらず）。入れてやってくれ」

「………入れ。」

「お、おう。ありがとう箒。あとレイも」

オレにもちゃんと礼を言ってから一夏は恐る恐る部屋の中に入っていた。

そして一夏が部屋に入るとドアはバタンッ！！と音を立てて閉められた。

一夏…ま、頑張れや。

心の中で投げやりな励ましを投げかけ、オレは隣にある自室に入っていた。

あ、一夏と篠ノ之が隣の部屋なのか。へー。

因みに、さっきの人ばかり、帰っている者もいたが…

「ね、ちょっと入ってみようよ」

「だ、大丈夫かなあ…?」

「いけるいける!」

そろそろドアを開けて中に入っていく勇者達もいた。

オレが自室に入ったとき、すでに電気はついていた。つまり、同室のやつはもう中にいるということだ――

「あゝ! レイレイだゝ、お帰りー! これからよろしくねー」

「…ま、まさか同室ってお前か…?」

そこにいたのはだぼだぼした気ぐるみパジャマを着た、さつき生徒会室でいたやつ。

つまり、

「やあやあ、これから一年を共に過ごす仲じゃないかー」

布仏本音だった。

うおおお…こいつか、よりによってこいつなのか…! いや、逆に助かったと考えるのがいんじゃないのか…!?

そうだ、知り合いだっただけマシとポジティブなシンキングをするべきだ、うん。

「……はあ。まあいいや、これからよろしく、本音。」
「うんうん、よろしくー!」

とりあえず、さっきは軽く汗流しただけだったからな。シャワー使おうシャワー。体と頭洗いてえ。

「あゝ、とりあえずシャワー借りるけどいいか？」

「私はもうお風呂入ってきたからいいよー? っていうか、大浴場じゃなくていいの?」

「一人で入るほうが落ち着くんだよ」

そうなんだー、と言う声を聞きながらバッグを開き、寝巻きとその他もろもろを持ってシャワー室に向かった。

シャワー室に入る前に、隣の部屋からドゴスッ! という何か硬いもので人の頭を殴ったような音が聞こえた気がした。
一夏のやつ、大丈夫…だよな…?

〳〵次の日〳〵

オレと本音は、昨日本音が仲良くなったと言う女子二人と一緒に、食堂に向かっていた。

今日の朝飯はそういえば昨日何にも食ってなかったから多めに、ご飯、鮭、味噌汁、漬物、おひたしの和食セットにプラスもう一杯ご飯と卵だ。卵かけご飯って美味しいよな。

「い、いっぱい食べるんだね」

「いや、昨日晩飯食い損ねたから。普段はここまで多くはねえぞ？」
「そ、そうなんだ。」

安堵の息を漏らされた。え、朝飯って多めにとったほうがいいんじゃないのか？まあそこまで気にしてないけど。
好きなときに好きなだけ食うのが好きだ。オレは。

「…ん？」

女子二人、及び本音の視線の先には一夏がいる。やっぱり気になってんのかな、男だし。

ま、いっちょ貢献しますかね。篠ノ之には悪いが。

「はよ、一夏。ここいいか？こいつらも一緒だけど」

「ん？レイか。おはよ、別にいいぞ」

だってよ、と後ろを振り向くと

（あ、ありがとうー！！）

と目をキラキラさせながら三人が小さくガッツポーズしていた。そんなに気になってたのか。

そして周りでは

「あ、あの子達いいなー!」「私も早く声かけとけばよかった:」
「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよー」「なんですって!」

e t c e t c ……

など言われていた。

しかも、それは一夏にも聞こえていたようで

「レイ、なんていうか:ありがとうっ!」

何故か感謝された。篠ノ之にはさっきから地味にずっと睨まれている。

とりあえず、オレが一夏の隣って言うのもせっかくセッティングしたのにつて話なので、先に三人を入らせる。オレは最後。これで6人席が埋まった。

「うわ、織斑君って朝すっごい食べるんだー」

「お、男の子だねっ!」

「俺は夜少なめにとるタイプだから、朝たくさん取らないと色々きついんだよ」

おお、健康に気をつけてんのか。頑張るな一夏。

「つてかレイは置いといて、女子って朝それだけしか食べなくて平気なのか?」

「あ、それオレも思ってた。少ないよな、三人とも」

三人ともトレーの上に乗っているのは、メニューこそ違いが『食パン一枚』『飲み物』『おかず一皿（小盛）』だ。

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かなっ？」

「お菓子よく食べるしー」

…あのな、本音。他の二人はちょっとは『減量』を考えてるんだと思うぞ。

お前みたいにお菓子いっぱい食ってるわけじゃねーの。

あと、間食は控えたほうがいいぞ。太る。

……ただ、こういうやつに限って太らない体質だったりすんだよな。多分こいつもだ。

「…………織斑、私は先に行くぞ。」

「ん？ ああ、また後でな」

…あちゃー、やっちゃったかなオレ。

篠ノ之が元からとっとと飯を済ませる派だということを望む。

「織斑君って、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「お、同じ部屋だって聞いたけど」

「ああ、まあ幼馴染だし」

ええ！？、と周りがどよめく。オレは昨日見てて分かったからいいけど、皆驚くんだな。オレは話に参加はせずに黙々と飯を食っていた。

ここの鮭美味しいな。塩加減が絶妙。うああ、最後の一口…！うん、美味い。

「え、それじゃあ——」

と、一夏隣に座っていた女子（谷本さんって言うらしい）が質問しようとしたところで、突然手を叩く音が食堂に響いた。

「いつまで食べている！食事は迅速に効率よく取れ！遅刻したらグ라운드10周させるぞ！」

織斑先生。あのグ라운드10周は結構きついっす。と思いながらずぞぞー、と卵かけご飯の残りを吸い込む。

「一夏、先行ってんぞー」

三人も食べ終わったらしく、『お、織斑君ゴメンね！』といって片しにいく。一夏くグランド10周だよな、やっぱり。

ああ、そうだ。一年の寮長も織斑先生なんだってさ。こりゃ、夜に抜け出すのは諦めたほうがいいな。

遅刻はしなかったし、授業中もオレは寝なかった。完璧だな。

ま、一夏はまだ何も分かりませんって顔してたけどな。どんまい。

そんな授業後の休み時間、昨日いけなかった女子たちが一夏に質問

攻めをしていた。

——千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの!?

ヒ。クッ

これは気になる。

「え、案外だらしな——」

パァン!

「休み時間は終わりだ。散れ」

このタイミングで登場するか織斑先生。わざとか、まさか今のわざとなのか。

……まあ、案外だらしないらしいな、家ではあの織斑先生が（笑）
パァン!

「…何か言いたいことは？」

「すみませんでした」

なぜばれた。読心術でも使ったのか。いや、むしろ使えるのか…!?

「ところで織斑。お前のISだが、準備に少し時間が掛かる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園側で、専用機を用意する」

一夏。頭に?ついてんぞお前。専用機くらい分かれ。……いや、代表候補生知らない位だもんな、知らないか…。

「ええ〜っ！？専用機！？一年生の、この時期に！？」

「つまりそれって政府から支援が出るって事だよね！？」

「いいなあ〜。私も専用機がほしい〜」

オレも一応持ってるんだよな。専用機。

一夏はまだ状況が分かってない。顔に書いてある。

「∴織斑、ISの基本事項6ページ。音読しろ」

見るに見かねた織斑先生が、織斑に状況を分からせるための手助けをする。

「え、えーと∴『現在、幅広く様々な国家、大手企業などで開発・技術提供が行われているISですが、その中心である【コア】の製造技術は一切開示されておりません。現在世界中にあるIS467機。その全てのコアは篠ノ之束博士が製作したもので、これは完全なブラックボックスであり、未だに博士以外にコアの製造は不可能という状況にあります。各国家・企業・組織・機関ではそれぞれ割り振られたコアを研究・開発・訓練として使用しています。またコアの取引はアラスカ条約第7項に抵触し、あらゆる状況下で禁止されています』」

「つまりそういうことだ。本来ならIS専用機というのはいずれかの国家、あるいは企業などに所属していないと持つことは出来ない。だが、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的とした専用機を学園側で用意するということだ。理解できたか？」

「な、なんとなく∴」

ほんとに大丈夫なんだろうかね、この調子で。

この後、篠ノ之が『篠ノ之束』の妹だとカミングアウトされたり、それで盛り上がったクラス内を『あの人は関係ないっ!』と篠ノ之が怒鳴って絶対零度まで落としたり、まあいろいろあって休み時間になった。

あ、あと、やっぱりセシリアは専用機持ちだったみたいだ。自分で言ってた。

五話（前書き）

玲衣蘭の I S の設定変えたんで、修正しました。
I S の設定が気になるかたはどうぞ。

五話

放課後、オレは生徒会室へ向かった。

考えないようにしてきたのだが、まあ昨日あんな宣言をされてしまったんだから行かないわけにもいかない。

生徒会室のドアを叩こうとしたそのとき

「だーれだっ♪」

いきなりの目隠し。目をふさぐ手はさらさらしていて少し冷たい。うああなんか気持ちい…。

と、言うかこの声は。

「…はあ、会長。何してるんすか」

昨日、散々聞いた声。ここの生徒会長『更識楯無』の声だ。ってかほんとに何がしたいんだこの人は。相変わらず分からん。

「あん、もうちょっと反応してくれないとつまんない」

「別に楽しませる気はないっす」

会長を無視して「失礼します」、と生徒会室へ入る。後ろで「むー、可愛げが無いわねえ」と頬を膨らます会長はさらに無視する。中には既に虚さんがいて、本音もいるかと思ったんだがいらないみたいだ。

会長も中に入ってきたようなので、その辺にある椅子に腰掛けて、

本題を切り出す。

「で、何でオレいつの間にか副会長になってたんすか。説明をお願いします。」

これだ、これなのだ。俺の聞きたいことは。

昨日お目覚め直後にいきなり

『生徒会副会長になってもらうけどいいわよね?』

と言われたのは忘れようにも忘れられない衝撃的な出来事として記憶している。

説明を要求するのは当然だ。

「あら? あなたの御爺様から聞いたりはしてないの?」

「……は?なんでそこでじいちゃんが出てくるんすか?」

オレのじいちゃん、つまり現雑賀組組長。名を雑賀乾凱。さいがけんがい

オレがいつまでたっても勝てる気のしない爺。雑賀組の『最強』であるジジイだ。齢78歳。

「聞いてないみたいね。ちょっと、やらなきゃいけないことがあって雑賀組に協力を頼もうと思ったのだけど、乾凱さんから『あの馬鹿孫から了承を貰えたなら良い』って言われちゃったのよねー。」

「だから、オレを副会長にしてしまえ、と?そんなん応じると思っ
てんですか?」

つまり雑賀組と協力関係になるために、いや利用するためにオレを引き込もうとしてんのかこの人は。

……ふざけるなよ。

「そんな恐い顔しなーいの。やらなきゃいけないことっていうのは、

もうあなたに関係あることなのよ？」

「……どうということっすか」

オレに関係のあること……？オレは、昨日までこの人と関係なんて微塵も無かった。昨日が完全に初対面の筈だ。

「織斑一夏。」

「！？一夏に何するつもりですか」

アイツは……一夏はもうオレの友達だ。手出しするんなら、オレは死んでもあいつを守る気でいる。友達一人守れないで、これから何を守れるっていうんだ。何を成せるっていうんだ。

「だから、そんな恐い顔しないの！逆よ、逆。私……いえ『更識』は今、織斑一夏護衛の任を受けている。いえ、護衛と言うよりは、監視。織斑一夏が自らの身を守るようにする必要がある。」

「ただ、今おおっぴらに動くとはそれはそれでまずい……ってとこか？」

だから、【偶然】にも織斑一夏と同じクラスで隣の席の『雑賀』に協力を頼むことにした……と。雑賀の協力を受けられれば、もしIS学園の外で事が起きても最悪何とかできる。

「そういうこと♪」

「……はあ。わかった、分かりましたよ。手伝います。オレも、一夏が狙われるってんなら動かないわけにはいかないっすから。」
「んふ、そう言ってくれると思ってた。ありがとう」

そういつてイタズラ成功しました。見たいな顔で笑う会長。
あーどうせここまでの流れ全部予想済みなんだろうな。くそっ、
なんか嵌められた気分だ。

「それでね？ お手伝いしてもらうにも、それなりの強さが必要だと思ふの」

「……へえ、それで？」

「あは♪しばらくの間、私がれいちゃんを鍛えてあげる。もちろん

こいつ あラッキーだ。まさか、こんな早くに、こんないいコーチを見つけれなんて…な。

オレは、日本代表候補だがまだまだＩＳについては雑魚も雑魚。ここでいっちょご教授してもらいますか。

「そいつは、こっちとしても嬉しい提案ですね。強くなれるんならなんだってやりますよ、オレは。」

「あら、じゃあまずは私と一緒に風呂に――」

「前言撤回をお願いします」

なんでこの流れで一緒にお風呂が出てくんだよっ！ わかんねえよ。やっぱこの人わかんねえよっ！

「???? そういえば、レイちゃん昨日と口調違うのね」

虚さんが、素朴な疑問を口にする。

…まあ、仕方ない。うん、しかたねえんだよこれは。

「…まあ、一応負けましたんで。オレ、敗者は勝者の言うこと聞くもんだって自分理論あるんで、今回はそれを自分に適用させただけ」

です。」

「自分に厳しいのは良いことだと思うわ。」

と、というか相手に勝ったら『オレの言うことを聞け』って言うのに自分が負けたら『お前の言うことなんて聞くもんか』って言うのが駄々っ子みたいで嫌だ。

自分理論はまず自分が守らなきゃな。相手に押し付けけるのはその後。ま、だからオレはじいちゃんに逆らえないんだよなあ…。あと、実はちゃん付けされるのすごく嫌なんだよなあ：我慢我慢。

「んふ、じゃあまず第四アリーナにでも行こっか。専用機は持っているでしょう？」

「ああ、はい。一応持ってます。」

そう、専用機を持ってるって言っても、オレの場合一応、なんだよな。

この春休みに貰ったばかりで、まだ30時間も使っていないと思う。だから一応。

まあ、だからこそこの機体での操作に変なクセが完全につく前に、いろいろ教えて貰えそうだ。

とにかくあんだけ言ったんだし、セシリアには負けたくねえし、徹底的に鍛えてもらえるだけ鍛えてもらおうことにしよう。

「じゃあまず、どれくらい動けるか確認するね。IS起動させて」
「はい。」

卵の殻が内側から破られるイメージ。それで、オレはIS『八咫鳥』を身に纏う。

「へえ。それがれいちゃんの専用機なんだ。かっこいいね」
「名前は『八咫鳥』って言います。日本の第三世代機です。」

オレのIS『八咫鳥』は色は全体的には黒々とした紫。光に照らされて紫にやっと見える程度で、暗いところだとただの黒に見える。その周りには大きな円盤のような物理シールドビットが二枚、レーザー銃のビットが二機、計四機のビットが浮遊している。

因みに、名前はシールドビットが『天岩戸』あまのいわと、レーザー銃が『八咫鏡』やたのかがみだ。

そして、

(…来いっ!)

近接ブレードの『天叢雲』あまのむらくも。大きさは、まあ測ったことないから良くわかんねえけど、大体ISと同じくらいの長さがあるな。野太刀ってところか。

「あれ?その装甲、もしかしてソーラーパネルかな」
「はい、そうです。オレの『八咫鳥』は主に太陽エネルギーを利用します」

だから、太陽の化身『八咫鳥』の名前を貰ったんだろうな。色もソーラーパネルだから黒がかった色になってるし。

「そうなんだ。でも表面装甲分だけでエネルギーって使えるくらい集められるの？」

「それについては、これがあるので大丈夫です。」

そう言って、オレは『八尺瓊勾玉』を変換し取り出す。

やさかにのまがたま

『八尺瓊勾玉』は、縦2m横1mのソーラーパネルで、それが30枚セットになっている。

戦闘開始直後にこれを雲の上まで飛ばして、エネルギーを集めさせるのだ。

エネルギーが集まると、一枚にまとめて空から降りてくるようになる。

しかもこのソーラーパネル、既存のどのパネルよりもエネルギー変換効率がいい。

「なるほど。じゃあ私も」

そういつて会長の展開したISは、オレが今まで見てきたどの機体とも似つかなかった。

アーマー面積が、圧倒的に少ない。だが、それをカバーするかのように透明の液状フィールドが、まるで水のドレスのように形成されていた。

そしてその横に左右一対の状態で浮いているクリスタル――あとで聞くことになるのだが、アクアクリスタルと言うらしい――そこから水が発せられており、水のヴェールを纏っているかのように見える。

その手に持つ大型ランスにも、水が渦を巻いて巻きついており、ドリルのようになっているようだ。

なんだあの I S。なんで水纏ってんだ…？

疑問に思いながらも、模擬戦を始めるのかと思いき身構える。

会長は自然体のままだ。

「さ、何処からでもかかって来なさい」

その言葉を皮切りに、オレは『天叢雲』を振り上げた――

結果

「だめね。全然だめよ、このままじゃ。せっかくいい機体を貰っているのに機体を生かせていないし、なにより移動にも無駄が多すぎる。とりあえず、移動もそうだけどビットを動かしながら戦闘できるようにしてもらわなくちゃただのいいね。太陽出てないときは力押しできないんだからこれくらい出来るようにならなきゃ誰にも勝てないわ。まずは……………」

模擬戦は終わり、オレは結局一撃もまともに入れられないまま終わった。

うあああああ……………こんなんで大丈夫なのかオレ…！

くそっ…絶対にいつか会長を倒して『最強』になるんだからなあっ
！！

五話（後書き）

なんかおかしいところあったら感想をお願いします。

六話

くクラス代表決定戦（一日目）当日

オレは、今一夏と篠ノ之と一緒に、第3アリーナ・Aピットにいた。今回の勝負、三人でクラス代表を決めるということだったのだが、どのような組み合わせなのか織斑先生に聞いたら、

『ん？ああ、そのことか。組み合わせについてはくじで決めた。二人がまず戦って、その後勝った方が次の日に残り一人と戦うようにする』

とのこと。一人シードがあるってことだ。シードのやつについては公平にするため、最初の戦闘は見せないようにするらしい。ま、妥当なところか。総当りとか時間かかるしな。

んで、くじの結果オレはシード権を見事勝ち取ったわけだ。

客席にいるわけにもいかないから、とりあえず一夏に激励の言葉をかけに来たんだが――

「なあ、箒・・・」

「何だ、一夏」

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか、なら気のせいだろう」

「たしかI Sのことを教えてくれてあの時いったよな？」

「・・・（フィツ）」

「目をそらすな」

「・・・」

I S、結局教えてもらってなかったのか…。なんていうか、その、どんまい。

ってかまずアイツの場合専用機すらまだ来てないみたいだ。

「……篠ノ之。こう、せめて基本的なIS戦術とかさ、そんなんでも教えてやれ——」

ギンッ！！！！

こ、こえええええ！！！！めっちゃ睨んできた。美人が睨むと怖いんだよっ！

篠ノ之ってマジで一夏関係になると恐しいよな。いや、普通に乙女ってるだけのときもあるけど。

どうすればいいのか分からない現状に、オレ達は次第に誰も言葉を発せなくなっていた。

そんなとき、

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

血相を変えて、やまや先生がオレ達のところへやってきた。

「山田先生、落ち着いてください。ほら、深呼吸深呼吸」

「え……？あ、はい。すくくくはくくく、すくくくはくくく」

一夏も流石に落ち着けたほうがいいと感じたのか、やまや先生に深呼吸をさせ始めた。

ううん……ってかそこ素直に深呼吸するんだ……。やまや先生もつと戸惑おうぜ。いきなり深呼吸要求されたんだし。

しかし、ここでオレは、この一週間放課後に稽古をつけてくれたあの人の行動が影響したのか、ムクムクとイタズラ心が湧いてきた。

「はいっ！そこで息止めて！」
「うっ」

……はっ！！やっちゃった。しかもやまや先生素直に息止めてるし。いや、ちょっとは考えて行動とかしましょうよ先生。だから一週間で生徒からあだ名いっぱい貰うんですよ先生。

あ……だんだんと苦しくなってきたみたいだ。酸欠で顔が赤くなってきた。

やっべ、どうやって止めさせればいいのかわからねえ。

「……………」

「……………ぶはあっ！ま、まだですかあ？」
「バアンツ！」

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」
「……………うあい」

織斑先生からお決まりの出席簿アタックを食らった。いてえ。こっちも混乱して止め方が分からなくなりました。すみません。

「そ、それでですね、織斑くん。来ました！」

「なにがですか？」

「織斑くんの専用ISです！」

「……………え？」

おお、来たのか。
別にまだここにいても大丈夫の筈。初期設定くらいなら見ていいだろ。

「織斑、すぐに準備しろ。アリーナの使用時間が迫っている。ぶっつけ本番でものにしろ」

「…はい？」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ、一夏」

「あ、あのー」

「あ、そうだ。負けたらなんか奢れよ」

「え、いやちょっとそれは――」

「「早く！」」

「は、はい！」

やったね。これで一夏が勝っても負けても嬉しいぜ。個人的には正直負けてほしい。

セシリアをぶっ飛ばしてえからなー。一夏には悪いが。ま、でも友達が勝ってくれたほうが素直に喜べるんだけどな。

でも、ま。オレはアイツは勝てるって思うけどな。

――きつとあいつは、一夏は主人公なんだ。なら、負ける筈が無い。

そこで、ごごんつと音がしてピット搬入口が開く。

斜めに開く型のドアが、鈍い音を響かせながらゆっくりと開いている。

――そこに、『白』が、いた。

side 一夏

ピット搬入口の中から姿を現したそれは『白』かった。飾り気のない真白。眩しいほどの純白を纏ったIS。それが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが・・・」

「はい！織斑くんの専用IS【白式】です！」

真っ白いそれは、俺を待っているように思えた。そう、このときを待っていた。ただ、この時を。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないから、フォーマット初期化と最適化は実戦で行え。できなければ負けるだけだ。いいな？」

「ああ、分かってる」

初めてISに触れた時の、電撃のような感覚はない。ただ、馴染む。理解できる。これが、何なのか。何のためにあるのか。——分かる。

「背中を預けるように——ああ、そうだ。座る感じでいい。後は白式のシステムが自動操作で最適化する」オート

千冬姉の言葉どおり、装甲を開いているIS——白式に身を任せる。受け止めるような感覚がしてから、すぐに俺の体にあわせて装甲が閉じた。

かしゅっ、かしゅっ、という空気を抜く音が響く。そして、生まれたときから我が身だったかのような一体感。融和するように、適合するように、最初から俺のためだけに造られたかのように白式が『繋がる』。

解像度を一気に上げたかのようなクリアーな感覚が視界を中心に広がって、全身に行き渡る。各種センサーが告げてくる値は、どれも普段から見ているかのように理解できる。

「あ」

——戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム【ブルー・ティアーズ】。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り——

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

いつもと同じ態度に見える千冬姉の、その微妙な声の振るえまで知覚できる。——ああ、心配してくれてるんだな。

「大丈夫だ、千冬姉。行ける」

「そうか」

ほっとしたような声。けれどそれは、ISのハイパーセンサーがなければ恐らく分からないほどのブレだった。

（まあでも・・・俺のこと名前で呼んだし、千冬姉っていつでも怒らないし。やっぱ分かるかな？）

それとなく、箒の方に意識を向ける。目を向ける必要はない。何せ、自分の周り360度全方位が『見えている』から。

「・・・・・・・・」

何か言いたそうな、けれど言葉に迷っている、そんな表情。これもおそらく、普段ならわからないくらいなんだろう。そして、レイにも意識を向ける。

（ははっ。あいつ、ほんつとにいつもと変わんねえや）

その瞳に写るのは、絶対の信頼。俺が、『織斑一夏』が勝つと、微塵もブレずに信じている表情。

「箒、レイ」

「な、なんだ？」「おう」

「行ってくる」

「あ、ああ……。勝ってこい」

「はっ！さっきオレが言った事忘れんなよ！」

「ああ！」

その言葉に答え、俺はピット・ゲートに向かった。かすかに体を傾けるだけで、白式はふわりと浮かび上がって前へと動く。

ちきちきちきちきちきちきちきちきちきち……

クリアーな意識の、その裏側では白式が膨大な情報量フイッテイングを処理していた。俺の体にあわせて最適化を行う、その前段階の初期化フォーマットを行っているのだ。

今こうしている一秒間にも、白式は表面装甲を变化・整形させている。ソフトウェアハードウェア中身と外見の両方を一斉に書き換えているのだから、扱っている数値は見たこともない桁を示していた。

ともあれ、今は裏方バックグラウンドに意識を向けている場合ではない。ゲート開放まで後2、05718422秒——『敵』がそこにいるのだから。

side 玲衣蘭

あいつは行ったか。

オレは、この戦いを見てはいけないし、敗者から何かアドバイスも貰ってはいけないことになっている。

だがまあ、そんなの指定されなくてもオレから自主的にやらんようにしたのにな。

『相手はオレのことを知らないのに、オレは相手とどう戦えばいいのか知っている。』

そんな状況を、自らの手でなく他人の手で作られて勝っても、何も嬉しくない。そんなのは『最強』には程遠い行為だ。

『最強』ならむしろ、逆の状況で相手を完璧に負かさないとけない。

ああ、別に自分で相手のことを調べてやるのはいいんだけどな。今回みたいに状況でこうなるのが嫌なだけなんだ。

そんなことを考えながら、アリーナの更衣室で勝負が終わるのを待つ。

一夏は、やっぱり勝つだろう。

（30分後）

『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

…あれ？

一夏、結局負けたのか。うわぁ…あんな自信満々に送り出したのに…はずかしっ！！

とりあえずAピットに戻ってくるだろうし、行くか。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

オレがAピットに着くと織斑先生によって、負けた一夏は馬鹿者から大馬鹿者へとランクアップしていた。うわ、すげえ嬉しくなさそ

うな顔してる。

因みに、ダウンじゃなくてアップな。ここですとにでるぞ。

「武器の特性を理解せずに使うからああなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があったらISを起動しろ。いいな」

「・・・はい」

一夏は真面目にへこんでいるらしく、大人しく首を縦に振る。アレだな。ちよつと勝てそうになって調子乗ってカッコいいこと言ったけど結局負けたパターンだな。厨二病でも再発したのか一夏。

「えっと、ISは今待機状態になってますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。はい、これ」

どさっ。

一夏は手の上に乗せられた電話帳サイズの本『IS起動におけるルールブック』を見て呆然としている。そしてさらに、一枚一枚の薄さに戦慄している。

分かる分かる。オレも最初それ渡されたときそんな感じだったぞ。

「何にしても今日はおしまいだ。帰って休め」

弟をいつわる気持ちって、この人にはないんだろうか。いや、きっとあるはず。さっき一夏のこと心配してたし。

「一夏、雑賀。帰るぞ」

「ん。レイでいいぞ、篠ノ之」

「む、そうか。なら私も箒でいい」

しのの…箒もさ、一夏鈍感だって分かってるんだからさ。もうちょい、こう…優しくしないと一夏が誤解するぞ？

その後、特に会話が発展することはなく、寮までの道のりを歩いていた。

「……………」

その途中、箒が一夏のことをじーーーーっと見ていた。一夏も、その視線に気づく。

「な、なんだよ？」

「負け犬」

「ぐあっ」

……………箒、それとどめ止め。

そりゃ、自分の好きな男が強くあってほしいってのは分かるけどさ……………もっとオブラートに包もうぜ？

また、沈黙が続く。オレとしてはこういう空気苦手だから早々に話題を提供したいんだが……………横を見るとさ、箒が何か言いたいたいけど踏ん切りがつかない、みたいな顔して一夏をチラチラ見てんだ。流石に口を出すわけにはいかねえだろうよ。

そして、踏ん切りがついたのか箒が口を開く。

「一夏」

「ん、なんだ？」

「その・・・なんだ、悔しいか？」

ああ…確かに聞きづらい。これで悔しくないなんて言われたらどうしよう…、とか考えてたんだろうな。

「そりゃ、まあ。悔しいさ」

「そ、そうか。それなら、いい・・・」

だがまあ、一夏はそこで悔しくない男じゃない。箒もどこか満足げだ。

よし。やっと口はさめる。ついでに箒の手助けもしよう。

「お、そうだ一夏。明日からはISも篠ノ之に教えてもらえよ？」

「へ？あ、ああ。そうだな、ISも来たし。…ってあれ？レイは教えてくれないのか？」

「オレはパス。自分のことで今は精一杯だ。そうだな…クラス対抗戦の後までオレは駄目だな」

実際、まだあの機体を完全に把握したわけではないし、会長に教えてもらっている途中に他に教えるってのもな…。会長はクラス対抗戦まではいろいろ教えてくれるって言ってたから、その後オレが一夏にいろいろ教えればいいらしい。

「そっか。明日、がんばれよレイ。…と、いうかそういえばお前明日セシリアと戦うんだろ？あいつ専用機持ちで代表候補生なんだから、大丈夫なのか？」

…ん？ああ、そういう一夏には言ってなかったか？

「ああ、それなら問題はねえな。オレだって専用機は持ってるし、

これでも日本の代表候補生だ」

と言いながら、左手を上げて待機状態の『八咫鳥』を見せる。
相手とは立場なんてそう大差ないし、この一週間あの人から教えてもらったことはちゃんと入ってきているんだ。負けるつもりなんてない。

……あれ？一夏と箒のやつ固まってやがるな。

おーい、生きてるかー？と二人の顔の前で手を振ると

「「……なにー！ー！！？（なんだと！！？）」」

二人にめっちゃくちゃ叫ばれた。うわっ、耳いてえ！

「うわっ、いきなり大声出すなよ。びっくりするだろうが。」

「お、おう」「う、うむ」

うむ、二人とも素直でよろしい。
なんてな。

「ま、とゆーわけでオレの心配はしなくていいぞ！心配するくれえなら明日の応援を待ってる！」

「：おう、応援はするに決まってるだろ」

「ああ、応援くらいするさ」

そりゃあありがてえな。勇気百倍、心は万倍ってか。

「それより一夏のIS訓練の話だろ？」

「あ、ああ、そうだった。箒、ISの操縦教えてくれるか？」

「……………」

やっべ、なんか知らんが箒の機嫌があまりよろしくなさそう。
アレか？オレが一夏に先に聞かれたからか？乙女だな箒。

「まあ、箒が嫌だっていうなら他をあた——」

「い、イヤとは言っていない！」

おお、いきなり素直になった。がんばれ箒！ラストサムライ！
ただ、はっ…と自分の剣幕に気づいた箒は一度コホン、と声の調子
を戻し、

「その…一夏は私に教えてほしいのだな？」

「そうだな」

一夏のこの気軽さ。多分脳内は『まあ幼馴染だし知らない人より気
楽だな』くらいにしか考えていないだろう。

こいつは何処まで鈍感なんだ。

しかし、

箒はその言葉を聞いてそうかそうか、と嬉しそうに笑っている。

「よし、ではこの私が教えてやろう。特別にな」

因みにこのとき箒は『特別に』を強調していった。箒の機嫌は絶好
調だ。

「では、明日から必ず放課後はあけておくのだぞ、いいな？」

「おう」

うんうん。これで一応しばらくは大丈夫そうだな。あと、クラス対

抗戦までに二人の距離が縮まってる嬉しい。

「ところで箒」

「うむ、なんだ？」

お？なんだなんだ？まさかこの場でついに愛の告は――

「さっきからそわそわしてるけど、もしかしてトイレに行きたいのか？」

一夏ってさ、ほんっとうに馬鹿だよな。

バシーン、と竹刀の音が空に響き渡った。

「あ、そうだ一夏。後でなんか奢れよ？オレ的には500mの四ツ谷サイダーがいい」

「……………はい」

七話（前書き）

今回は視点変更がいつもよりちょっと多いです。

あと、ISの設定変えたので修正しました。大まかな流れは変わってないんで、あまり気にすることじゃないかと。

七話

翌日、オレ対セシリアの日。

セシリアは昨日と同じように先にアリーナについているらしい。
オレはAピットで準備運動をしていた。

何でかって？そっちのがやる気出るだろうが。

因みに、一夏と箒はアリーナの客席にいる。

昨日のように織斑先生や、やまや先生がいるわけでもない。

代わりといっってはなんだが、ここにいるのは

「ふふ、向こうの子はもう準備万端みたいよ？早く行ってあげなさい」

「…なんでいるんですか、会長。仕事は？」

そう、IS学園生徒会長『更識楯無』が来ていた。

「もう、そんなこと気にしないの。器の小さい女は嫌われるのよ？」

「そこ、男って普通入れるとこですよね？」

そんな会話をしながらも準備運動は続ける。うん、いい感じだ。

「あら、もういいの？」

「はい、もうそろそろ行こうと思います」

そう言って、オレはIS『八咫鳥』を身に纏う。

視界がクリアに、いつもの万倍よく見える。解像度が一気に上がった。

たような感覚。

『——戦闘待機状態のISを感知。操縦者…セシリア・オルコット。登録ISネーム【ブルー・ティアーズ】。戦闘タイプ…中距離射撃型。特殊装備有り——』

セシリアの方は、本当にもう準備万端らしいな。

……はあ、ちょっとは期待したんだけどISのハイパーセンサーをもってしてもこの人から心配は読み取れない。

信頼されているのか、この人が感情を隠すのが巧すぎるのか…。ここは信頼されてるって思っところ。

「んふ、いつてらっしやい。頑張ってね」

「ああ、ありがとうございます。じゃあ、行ってきます」

そういつて、アリーナ中央セシリアの下へ。途中で「勝ったらまた膝枕してあげる。あは♪」とか聞こえたが、聞かなかったことにしよう。

それよりも今は目の前の敵——セシリア・オルコットとそのIS『ブルーティアーズ』に集中するべきだ。

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その機体で最も特徴的なのは、背後に従える4枚のフィン・アーマー。

そして、それを駆るセシリアの手には長大な銃器——検索完了。67口径特殊レーザーライフル《スターライトmk?》と一致——

アリーナの直径は200m。発射から目標到達までの予測時間0，4秒。

オレが出てきた時点で試合は始まってるから、いつあっちが撃ってきてもおかしくはない。

それにしても

――ああ、今日はいい天気だな。

「あ、あなた、専用機持ちでしたの？」

ずいぶんと狼狽した声でセシリアにプライベートチャンネルを繋げられる。

「ん？ おお、そうだよ。いってなかったか、そういや。」

ふむふむ、じゃあいっちょ名乗りでも上げてみようか。

「IS学園一年一組所属！ 雑賀玲衣蘭！ 日本の代表候補生！ ISは『八咫鳥』だ！」

その意図に気づき、セシリアも名乗り返す。

「IS学園一年一組所属、セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生ですわ。ISは『ブルーティアーズ』」

一瞬の空白を置き

「いきますわよ」

と言うセシリアの言葉と

キュイン！

という独特の銃声から戦いは始まった。

最初の一発を、『天岩戸』の一枚を移動させ防ぎながら移動する。そしてその移動の途中に今度は『八咫鏡』を二機同時操作をしセシリアを狙う。更にそれと同時に『天叢雲』を呼び出し切り込みに行く。そして切り込みに行きながらも『天岩戸』で周りのビットの攻撃を防ぐ。

これがオレがこのISを貰ってからひたすら練習してきた『天岩戸』『八咫鏡』『天叢雲』の同時使用だ。

これが難しくて、この機体の扱いが難航していたのだがこの一週間で信じられないほどの上達をした。

いい先生がつくとすごいんだな、と身にしみて実感させていただいたよ。

ただ、6動作（『八咫鏡』×2、『天岩戸』×2、『天叢雲』、移動）を同時にするのはISを使ってもなお、脳に負担がかかる。まだ6つのことを同時に出来るように脳が出来上がっていない。あと一ヶ月練習したら余裕に出来る自信はあるのだが…。今はそんな事言っても仕方がない、とにかく早く速く決める。

一息ついてからオレの切り札に繋がる大切な鍵、『八尺瓊勾玉』を30枚全て展開し、高速で上空へと飛ばす。

この指令を出した後は、『八咫烏』のほうで向きの調整など全てをやってくれる。

セシリアは警戒したが、おそらくＩＳにただのソーラーパネルだと教えてもらったのだろう。驚いた顔をした後に、上空に対する警戒を解いた。

「今の動き：なかなかやるようですわね：！しかし、それももう終わりになりますわ。さあ踊りなさい、わたくし、セシリア・オルコットと『ブルーティアーズ』の奏でる円舞曲で！」

セシリアの攻撃が本格的になってきた。もう考える余裕もないなこりやあ。

四機のビットがめまぐるしく動き回り、
上から、下から、右から、左から、前から、後ろから

[illegible]

それを頭をフル回転させ、『天岩戸』を全力で動かし防ぎながらも接近、お返しとばかりに『八咫鏡』を撃ちまくってやる。

集中力が一瞬でも切れたら終わりだ。集中、集中、集中。

本当にあの子には驚かされる。

まさかたった一週間で止まりながらしか全てのビットを扱えなかったところから、ビットを全て使い更に近接ブレードで接近できるようになるなんて。

天才、と言うべきなのか。いや、あの子のことだ。きっとこの一週間、『異なることを6つ同時にこなす』ための練習を怠らなかったに違いない。

二つのことを同時に考え、三つのことを同時に考え、四つのことを同時に考え五つのことを同時に考え、六つのことを同時に考える。これを、一つ分増やすことのどんなに困難なことか。

彼女——玲衣蘭は、10分いか保たないと言え、それを一週間で二つ分増やしたのだ。努力、だけでは成し遂げられない。彼女にはやはり才能がある。

それに、彼女の訓練時の集中力、理解力には目を見張るものがある。それに、あのIS『八咫鳥』も、世界的にみて相当な技術力を駆使されているのだろう。

「本当に、ここを獲られちゃうかもしれないわね」

この、IS学園の『最強』の座を——

「でも、集中しすぎて相手の事が分析できてないのはまだまだだってところね」

side 一夏

「…レイって、強かったんだな」

「……………おう」

箒が隣でポツリと零した声に、俺はこんなことしか言えないほど、試合に見入っていた。

俺が昨日あんなにくらいまくった射撃を（しかもなんか俺の時よりも攻撃が激しい。なぜだ。）、時にかわし、時に撃ち落とし、時に物理シールドビットで防ぐ。そして、その手に持つ近接ブレードで切りかかっていく。

それだけで、俺には出来ないだろう。なにせ

レイは、それらを全て同時にこなしているのだから。

しかも、昨日戦っている途中に分かったことだが、同じ代表候補生のセシリアですら四つのビットを動かしているときは、それに集中してその場を動けなくなっているのだ。

四つのビットを同時に動かし、更に移動してセシリアに切りかかることの出来るレイの技量が示されている。

しかもただ動かすだけではなく、キチンとセシリアの銃弾に合わせ

て動かしている。

「ははっ、ISじゃあしばらくレイに勝てそうにないな」

心のそこからそう思って試合を見つめた。

（レイ、頑張れよ。）

side 玲衣蘭

（見えたっ！！）

集中して、セシリアまでの突破口を探すこと5分。5分と言うと短いように感じるが、オレもセシリアも完全に勝負に集中しての5分。体感時間は何倍にも延びている。

そんななか、希望の一筋の道が、見えた。

セシリアも同じような攻防が5分も続いて油断したのか、弾幕に少しの隙間が出来たのだ。

そこを

スラスター2つ分、の瞬時加速で一気に詰める！

『八咫鳥』には背中に二つ、両足、両肩、両肘に計四つのスラスターがついていて、理論的には最終的に両足、両肩、背中の計6つのスラスターを使い瞬時加速、及び個別連続瞬時加速が出来るようになるらしいのだが、オレはまだ其処までに到っていない。

だが、この距離ならこれでいけるっ！

「っ!?! 残念でしたわね! ブルーティアーズは6機ありましてよ!」
「!?!? なに――」

その言葉と共に出てきた二機。あのレーザーを撃つやつと形が違う
…? まさか、『弾道型』^{ミサイル} かつ!?

全ての動作を思考の外へと捨てて、『天岩戸』を目の前で全力展開
する。

炎を超えた『光』が、オレを通り過ぎる。そして、衝撃によって吹き飛ばされたオレはくると回転しながら地面に足をつけた。

(ギリギリセーフ…! だけど、もうシールドエネルギーが100を切ってる…。だが、『光』は貫った…!)

殆どの観客は、今何が起ったのかわからなかっただろう。

『天岩戸』は、シールドエネルギーを使用することで、本来ISについているシールドバリアよりも堅固なシールドを展開することが出来る。

だが、それでもここまで一気に残量がなくなる事はなかなかない。それほどに、今の攻撃が強力だったと言うことだ。

セシリアも、今の攻撃で完全に決まったと思っている。

そして、肝心のセシリアは爆発の煙でオレを視認できていない。恐らく、ハイパーセンサーには写っているだろうが…。それでも煙に阻まれて感知は出来るが見えてはいまい。

そして、丁度そのとき一枚の『八尺瓊勾玉』が降りてきた。

これはチャンスだな。

『八尺瓊勾玉』からのエネルギー

『爆発による光』からのエネルギー

この二つを使えば、一瞬で決められる…！

『八尺瓊の勾玉』からエネルギーを預かり、天叢雲に注ぐ。

そして背後に残りのエネルギーを放出し、煙のど真ん中を突っ切るように瞬時加速。通常の瞬時加速の二倍近い速度でセシリアに迫る。まさかここからくると思っていなかったのか、焦ったセシリアはまた『弾道型』で攻撃をしてくるが、そんな手は二度も通用しない。二つのミサイル、その間を針の穴に糸を通すような緊張感で通り抜ける。

そして――

ガキッ……パリンッ！

左手に持った『天叢雲』を振りぬき、シールドバリアを抜く。

そして、右肘のスラスタを全力で吹かしながらぶん殴る…！

ガキイーン…！！

『試合終了。勝者――雑賀玲衣蘭』

試合は、オレの勝利で幕を閉じた。

そして、試合時間はわずか10分にも満たなかったのだった。

Aピットに戻り、地面に足をつけ、ISを待機状態に戻す。
そこにいたのはやはり更識楯無その人で。

「ちゃんとピットを使えるようになったのはいいと思うけど、相手のことはもつとちゃんと見なさい。今のなんかは特に、ちゃんと見ていればもつと楽に勝てる相手だったのに」

「…はい。精進します。」

会長はそういいながらその手に持つ扇子を開き（日々精進って書いてあった。）、口元を隠す。

実際にオレが痛感していたことをズバツと言われてしまった。

うう…やっぱオレはまだまだだな。こんなんじゃこの人にいつまで経っても届きやしない。

「まあ、それでも」

会長は扇子を閉じながら、ふふつと笑う。

まだなんかあるらしい。うわあ、耳ふさぎてえけどアドバイスは素直に聞かなきゃな…はあ。

「最後の攻撃。ああいうの好ききよ？あは♪レイちゃん凄くカッコよかった」

そう言いながら会長はコッソリ、と閉じた扇子の先端でオレの額を叩きながら顔を近づけてきた。

ここでそういうこと言うかこの人は。だから人気高いんだろうなこの人。

あと顔近いですよ、顔が。

「ありがとうございます。…あと、顔近いです」

「近づけてるもの」

そしてこういう人だったなこの人は。

はつきり言おう。更識楯無という人は、人気がある。その理由には、性格や立ち振る舞い、その強さからのカリスマ性も理由の一つに上げられるが、何より――

――とんでもない美人なのだ。更識楯無という人は。

はね気味の、透明感のある水色のさらさらとした髪。均整の取れた、少女と大人の中間に位置するかのような顔。

余裕を感じさせる態度を持っていて、それでいてその顔に浮かべる表情はまるでイタズラをする子供のようで。

そのギャップが『更識楯無』という存在に一つの不透明性を与え、神秘的――は言い過ぎかもしれないが、そんな雰囲気を持つ。

まあ、一言で言うところ。

（うあああ…顔赤くなんなよ、頑張れ、平静を保つんだオレ）

なんというか、その、ドキドキするのだ。

わかるだろ？同姓でもさ、近くに寄られるところなるんだよ。しかも、女のクセに女の人とあまり関りのない生活を送ってきたオレみたいのは特に。

バレないといいんだけどな…。

「あ、レイちゃん顔赤い。あと耳が真っ赤だ。おねーさんに惚れちゃったのかなー？あはっ、私ってば罪作りい」

「なに馬鹿な事言ってるんですか、会長。あと、顔離してください。近いです。耳がくすぐったいです」

ばっちりばれましたねこの野郎。やっぱ顔赤くなってたか。耳もか。ああー恥ずかしいぞまったく。

あまりのことに、思わず顔を背けてしまい、その拍子に額から扇子が離れる。

「会長はやめてよー。楯無って呼んでくれていいのよ？このツンデレさんめっ」

「いえ、会長で通しますんで。あとオレはツンデレじゃないです」

扇子は下げて、会長は今度は扇子を持っていないほうの手で頬をつついてくる。

だーかーらー、顔が赤くなるって言うてんでしょうがこの人はー！もういい、とオレが体を反転させピットを出て行こうとすると。

「今日はいいいけど、明日。放課後に生徒会室に来て頂戴ね」

と、声をかけられた。昨日と今日は、訓練をいったん中止していたのだ。

多分、今日の戦いを見て明日からの訓練のメニューも変わっていくんじゃないかと思う。

はい、了解しました。会長。

と言いながら、オレはピットを出て行った。

後ろから、「あん、楯無でいいのに」と、聞こえたのは気のせいじゃないと思う。

はあ。あの性格がなければホント素直に尊敬できるのにな、あの人。いつか、あの人の仮面の下。わからせないようにしている部分を見てみたい、と思うのだった。

寮への帰り道、オレは一夏と箒がいるのに気がついた。どうやら待っていてくれたみたいだ。

「レイ、お疲れ様。あと、おめでとう」

一夏に声をかけられる。こう、やっぱいいよなこういう感じ。丁度日が暮れてきたころだから、なんかすっごい青春してる気になる。

「おう、ありがと。」

素直に礼を言うのは大事なことだと、母さんからもじいちゃんからも教わった。

だから、礼は素直に言う。

「うむ。一直線に突っ込んでいった姿は見ていて清々しかったぞ。」

あと、あの名乗り。まさに武士だな！」

との箒の意見。思わず、『ああ、こいつらしいな』と思ってしまう。
ほんっとにサムライだよな、箒って。

「お、おう。そいつはよかった。ありがとう」

そして、

夕暮れの空を見ながら、オレ達は寮への道を歩いていくのだった――

あ、クラス代表オレはパスしますって明日朝一で織斑先生に言いに行こう。

七話（後書き）

感想とか指摘とか、このキャラのこの台詞はこうしたほうがこのキ
ャラっぽいとかあったら感想をお願いします。

あと、相当くだらないことですが、自分のPCちよくちよくSが反
応してくれなくて執筆していると『くでう』とかなって焦ることがよ
くありまう。

八話（前書き）

本当は昨日投稿したかったんですが、昨日は腹痛でそんな余裕はありませんでした。うおお。

あと、誤字修正しました。ご指摘下さっためだか194さん、ありがとうございます。

八話

翌日、オレは本音たちと朝飯を食った後（今日のメニューはご飯、鯖の塩焼き、きゅうりの漬物、味噌汁。プラスもう一品でたらこ茶漬けだ。相変わらず食堂のおばちゃんはいいい仕事してると思う）、職員室へ向かった。

織斑先生にオレがクラス代表を二人のどちらかに譲ることを伝えると、

『まあ、お前ならそう言うだろうと予想は出来ていた。』との事。つてか、生徒会本部役員とクラス長って兼任できんのかな？

あ、普通に一夏に譲るにしょきゃよかった。このままじゃクラス代表セシリアじゃん。まずったな。クラス代表やめたい一心でそのこと頭からすっぽ抜けてたわ。

そしてその後のSHR。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

あれ？一夏になってる。セシリアじゃないのか…？

「先生、質問です。」

恐らくこのクラスで一番『へ?』と思っているのは一夏なんだろうな。

「はい、織斑くん。」

「俺、試合に負けた上に最終的に勝ち残ったの雑賀さんなんですが「あ、オレ辞退したから」、：はあ、俺はセシリアに負けたんですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

一夏の台詞をさえぎって辞退宣言。む、ため息つきやがったな一夏の野郎。

「それは・・・」

「それはわたくしが辞退したからですわ!!」

そして説明しようとしたやまや先生をさらに遮りセシリアが発言する。

ん? 何で譲ったんだこいつ。こないだまで『男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ!』とかなんとか言ってたのにどういう心情の変化だよ。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然のこと。なにせ、わたくしセシリア・オルコットが相手だったのだったのですから。それは仕方のないことですわ。」

まあ、代表候補生とズブの素人だもんな。正直オレも当然だと思う。……それでも一夏が勝つと思ったんだけどなあ……? あるえー?

「それと、まあ、わたくしも大人げなく怒ったのも反省しまして・・・」

確かに、確かにお前は大人気なかった。うんうん。ってかこいついろいろ変わってないか？内面が特に。

こないだまでのこいつだったら反省とか絶対にしねえと思うんだけど。

「一夏さん」にクラス代表を譲ることにしましたわ。IS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いに事欠きませんもの。」

胸に手をあててセシリアは言い切った。おお、そういえばそうだな。クラス代表なら戦いに事欠かないのか。

別にいいけど。あ、しくった、クラス代表降りなきゃよかったかも、とか思ってたねえから。

それにしてもこいつほんと変わったな。びっくりだ。今のこいつならクラス代表やらせていいと思う。

「いやあ、セシリア分かってるねー。」

「世界に一人しかない男子がいるんだから、持ち上げないとダメだよー。」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑くんは♪」

売るんじゃないその。売るならせめて写真とかにしろ。

「そ、それですわね。」

セシリアが少し顔を赤らめながらおずおずと言い出す。

なんだ？こいつらしくくねえな、このおどおど感。

「わたくしのように優秀でエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ……」

ああ、こいつも一夏に惚れてるクチか。なるほど理解した。そして『優秀でエレガント、華麗にしてパーフェクト（笑）』か。うん……なんてーか、その……頑張れ。

一夏の野郎モテモテだな。流石ラノベの主人公（仮）ってところか。でもなーセシリア。そういう発言すると怒るのがこのクラスにはいるんだぞー？

バン！

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな！」

バン！と机を叩いて立ち上がった箒が『私が』を非常に強調して言った。

ほらな。うえええ……眼光鋭過ぎるだろ箒さん。人を何人か殺せる目つきをしてるぜ箒さんや。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ！い、一夏がどうしても、と懇願するからだ！」

その眼光に怯むことなくセシリアは逆に箒に喧嘩をふっかけていった。恋する乙女パワーはこれに耐え切れるのか。すげえ。

あと、一夏は懇願してねえぞ。と思つて左を見ると一夏の顔には

『してねえー』つて書いてあつた。その顔がちよつと笑えた。

つてか箒ランクCなんだ。オレも一応Aなんだよな。でなきや代表候補生なんてやってらんねえし。

箒はどうしても一夏の教官やりたいんだろうなー。箒も恋する乙女だし。

「え、箒ってCなのか・・・？」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

一夏が『え：？マジで：？』見たいな顔で箒を見る。

ほら、箒も気にしてるんだからさ。言つてやるなよ一夏。

ホントに今の段階でのランクなんて関係ねえんだから。

「座れ、馬鹿ども。」

織斑先生がすたすたと歩いていってばしん、ばしんと箒とセシリアの頭を叩いて席に着かせる。

流石世界覇者。オレの最終到達点に立っていた、いやもまだ今立っている人。

凄みが半端ねえッス。

「お前らのランクなどゴミだ。私からすればどれも平等にひよつこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな。」

織斑先生に言われては反論の余地もないらしく、二人とも不満げにしながらもそれを口に出すことはしなかった。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前にも言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ。」

おおー、カッコいいね織斑先生。ってかくだらん揉め事って十代の特権なんだ。初めて知った。

ん？一夏がなんか言いたそうにしてんな。

（どうした、一夏？）

（いや、千冬姉の家でのだらしなさとの差が――）

バシン！バシン！

「お前たち、無駄話とはいい度胸だな」

「「すいませんでした」」

「分かればいい。」

くっそ。家でだらしない人がなにを

バシン！

「まだ何かあるか？」

「いえ…ありません…」

読心術身に着けてるぞこの人。絶対そうだ。なんで身に着けてんだこの人。読心術くらい身に着けないと最強には程遠いつてのか。わからん。

「クラス代表は織村一夏。異存はないな」

はーい、と一夏以外の全員が同意する。

一夏だけは『わけがわからないよ!』という表情をしている。

ま、一夏。これから頑張れや。

九話（前書き）

誤字訂正しましたー

九話

「では、これよりIS基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、雑賀。試しに飛んでみせろ。」

四月下旬。ようやくISの基本動作の授業が入ってきた。

試しに飛んで見せろって…。うわぁだりい。すっげーめんどくせえ。専用機持ちってこういうところ面倒くさいんだよな。授業のたびに前に出てやらされんの。

「早くしろ、熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ。」

せかされてしまった。とりあえず展開すつか。

だるいなぁと思いながら歩いて前に出て行って、歩きながら0.2秒で『八咫鳥』を展開する。飛ぶだけだから『天叢雲』『八咫鏡』『天岩戸』『八尺瓊勾玉』は出していない。はたからみたらチカッと光ったらオレがISを着ていたように見えるだろう。

『八咫鳥』のハイパーセンサーが繋がり、視界が一気に広くなる。後ろにいるクラスメイトの驚く顔は見てて楽しい。

因みにこれも、会長に習ったことの一つだ。曰く『展開するイメージを固めるためにポーズなんか一々とってたら実戦では何も役に立たないでしょ?』とのこと。

一応スポーツってことになってんだけどな、ISって。

ま、軍で開発されてるくらいだから誰も信用しじゃないんだろうが。

「雑賀は流石といったところか。織斑、集中しろ。」

オレのことをポカーンと見ていた一夏は織斑先生に注意されていた。しかし初心者の一夏はまだイメージに慣れていないのか、右腕――『白式』の待機状態がついている方の腕を左手で掴み、イメージを固めていた。

そして、0.7秒の展開時間で『白式』を展開させる。セシリアは、ブルーティアーズを既に展開し終わっている。

ブルーティアーズ、白式共に地面から10cmほど浮かんでいる。

「よし、飛べ。」

うあい。と気の抜けた返事をしてから、両足のスラスタを吹かし急上昇する。イメージするのは隼。上に落ちるようなイメージで飛ぶ。今日は天気がいいから、結構速く出来るな。

飛べ、と言われてからすぐに急上昇していったセシリアに追いつき、追い抜かす。「なっ……!？」とか言う声が聞こえたが無視無視。

天気がいい日の『八咫鳥』は鳥じゃなくて隼なんだぜ、とか訳のわからないことを考えながら停止する。

オレよりも遅れてスタートした一夏はそれなりの速さでこっちに来ているが、その上昇速度は『八咫鳥』はおろか『ブルーティアーズ』よりもかなり遅いものだった。

「何をやっている。スペック上の出力は八咫鳥は置いておくとして、ブルー・ティアーズよりも白式の方が上だぞ。」

まあ、そりゃあ中距離射撃型よりも遅かったら近距離格闘型として話にならねえからな。

『八咫鳥』は昼、夜、雨、曇り、晴れで大分スペック変わるから置いとかれたんだろう。

一夏は昨日急上昇と急降下を教えてもらったばかり見たいだし、こんなもんだらう。きつと自分にあったイメージすら掴めてないに違いないねえ。

馬鹿正直に『自分の前方に角錐を展開するイメージ』をしようとしてんじゃないかと思う。

「一夏さん。イメージは所詮イメージ。自分がわかりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ」

「とりあえず、自分の感覚を掴んどけ。何とかなる。」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体まだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」

一夏はどうもわかりませんって顔して首を捻っている。

あー、そこからか。確かに、理屈がわからないとイメージは掴みにくいな。理屈がこれまためんどくさいんだが。

「説明してもかまいませんが、長いですわよ。反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

うっわあ…めっちゃ長くなりそうだなこいつの場合特に。だる。

「わかった。説明はしてくれなくて良い。」

「そう？残念ですわ。ふふっ」

おお、一夏に自分が頭良いんだぜってアピールできて嬉しいのかセシリア。妙に嬉しそうだな。ってか楽しそうだな。

『馬鹿な子ほど可愛い』ってやつか。

「…ところで、レイはこれの理屈解るのか？」

「…お前、オレのこと舐めてんだろ」

この野郎、オレならきつと分かってないだろうって視線で訴えてやがった。

これくらい解らなくて代表候補生がつとまるか、バーカ。

そこで『解ってないのは俺だけなのか……!?』とか思っただけでろ。

「一夏さん、よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときは二人きりで……」

熱っぽい視線を混ぜて、セシリアが一夏に提案する。

ISに関する指導だったら、専用機持つてる同士の方が何かと都合良いしな。その点については箒よりもセシリアが一步リードしてるのか。

……こういうとき偶に向けてくる『こいつさえいなければ今二人きりなのに』オーラさえなければ純粹に良いやつなんだが。

「一夏っ！いつまでそんなとこにいる！早く降りて来い！」

授業中はオープンになっている回線から二人の声が聞こえたのか、箒がやまや先生からインカムを奪って怒鳴る。

因みに、肉眼では到底見えないような距離だが、ISのハイパーセンサーによってバッチリ見える。

まあ、本来宇宙空間での活動を目標にしているらしい（今はそんなこと微塵も考えていないような機体が多いが）ISは、これでも機能に制限がかかっている。

『八咫鳥』は実際に宇宙を目指した機体の実験機だから、機能制限を解いた場合のハイパーセンサーはとんでもないことになるらしい。だから

先生たちが見てないからと言って立ったまま寝ている本音もバッチリ見えている。後で軽く拳骨だな、アイツは。あと今日のおやつ抜

き。

「織斑、オルコット、雑賀。急降下と急停止をやってみせろ。目標は地表から十センチだ。」

「了解です。では一夏さん、玲衣蘭さん、お先に」

と言って一足先に急降下を始めるセシリア。

代表候補生ただけあって、その動きは見事だ。

因みに、セシリアとはもう名前で呼び合う関係になっている。一夏の隣の席だから、何かと話す機会だったし、ビットを動かしながら動く練習の仕方とかについても質問されたな。同じビット使いとして聞きたかったらしい。

「じゃ、一夏。オレは先に行くけど、勢いあまって地面に激突とかすんなよ」

と言に残し、オレも急降下を開始する。隼。隼のイメージだ。速く飛ぶときにはこれに限る。

地面につく直前に機体を起こし、スラスターを吹かして停止する。よしっ、ぴったり10cmだな。

完全に停止してから、一夏はどうなったのかと思ったそのとき

ズドオオオオン！！！！

地面に穴が開いた。

クラス中でくすくす笑いが広がる。

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った？グランドに穴を開けてど

うする。」

「……すみません」

流石は一夏。ギャグセンの高いことで。

一夏は穴から出てきたが、シールドバリアーのおかげで汚れも傷も一つも見当たらない。

「情けないぞ一夏。昨日私が教えてやっただろう」

「くくっ…ははははっ！！おま…マジ笑わせんなって！」

くくっ笑いすぎて腹がねじ切れそうだ…！激突とか、ヤバイだろっ。多分一夏の心は恥ずかしさとか情けなさとかでぼろっぼろだろうけど面白いんだから仕方ない。そうだろう？

そこで、俺たちの前にセシリアが出てきた。

「大丈夫ですか、一夏さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ、大丈夫だけど・・・」

「そう。それは何よりですわ」

といってうふふと微笑むセシリア。

ううむ…恋ってすげえんだな。このセシリアを一月前のセシリアに見せてみてえ。多分、「こんなの嘘ですわ！」って感じに激昂すつから。

「……ISを装備していて、怪我などする訳が無いだろう。」

「あら篠ノ之さん？他人を気遣うのは当然のことですよ？」

「お前が言うか、この猫かぶりが！」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ！」

言い合う二人。顔がだんだん般若になってんぞ。自重しとけ。

「なあ、レイ」

「なんだ」

「なんであいつらいきなり喧嘩始めたんだ…？」

この朴念仁の唐変木めが。

多分、一夏に惚れても相当なストレートなアピールしないと付き合えないんだろうな。

『付き合ってください!!』『いいよ？何処に付き合えばいい？』
とか普通にやりそうだからな一夏は。

「邪魔だ、馬鹿者ども。端っこでやっている。」

箒とセシリアを押しつけて、織斑先生がやってきた。おお、素直に退いているぞあの二人が。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう。」

「は、はあ・・・」

「返事は『はい』だ。」

「はっ、はい！」

「よし、やれ」

言われてから、一夏は左手をぎゅうっと握り、集中する。

光が形を成して出てきて、その光が収まったところにはその手に剣――雪片式型が握られていた。

一夏はよしっと小さくつぶやく。
が

「遅い。0・五秒で出せるようになれ。」

織斑先生からしたら遅かったようで、結局だめだしを食らっていた。

「オルコット。武装を展開しろ。」

「はい。」

セシリアが左手を肩の高さに上げ、真横に突き出す。一夏の時と違い、一瞬爆発的に光ったと思ったらその手には《スターライトmk ?》が握られていた。

「さすがだな、代表候補生。だが・・・、オルコット、そのポーズは止める。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ。」

「で、ですが、これはわたくしのイメージをまとめるために必要な・・・」

「直せ。いいな。」

「・・・、・・・はい・・・」

イメージはどんなポーズでもどんな格好でも固められるようにしなきゃな。織斑先生の言葉にはやっぱり逆らえないらしく、セシリアも素直に、しぶしぶと言った感じでうなずいている。

その後、セシリアが近接用の武装展開をさせられ、うまくイメージできなくて結局武器名を叫ぶという屈辱的な方法で呼び出していた。ああ、アイツ近接本ッ当にできねえんだな…。

しかも話によると一夏にも懐に入られたらしい。どうやってあの弾幕の中を突き進んだんだ一夏。オレでも難かったのに。

でも、それなら何で一夏は負けたんだ？　そーいや聞いてなかったな。
まあ良いや。

「雑賀、武装を展開しろ。」

「うあ…はい」

うあいつて返事しようとしたら出席簿がびくっと動いたので急遽は
いに変更する。

その後そのままポーズを落ち込んだポーズのまま武装を全てイメー
ジする。

(…集合)

オレの周囲が一瞬光った後、オレの左手には『天叢雲』が、周囲に
は一夏に照準を合わせて『八咫鏡』が、背後には『天岩戸』が、上
空には『八咫瓊勾玉』30枚全てが展開された。

皆の『スゲー』って視線がオレに突き刺さる。特に一夏なんてアホ
面でこつちをポカーンと見ている。『八咫鏡』撃つぞコラ。

これも、会長からの教え。『一々イメージに時間を(r)y』らしい。
オレも実際そう思う。

「ふむ。良いだろう。流石は代表候補生だな」

「ありがとうございます」

会長の教えてってやっぱ凄いなー。実感する。無駄なことは
何も教えてないで、実戦で本当に大事なことを教えてくれている。

あ、セシリアに睨まれた。おおう、怖い怖い(棒読み)。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片づけて

おけよ。」

「……はい」

箒には目をそらされ、セシリアはもう帰っている。
仕方ない、手伝ってやるか。

一夏から、救世主を見つけたような顔で見られた。なんかむかついた。
たのでとりあえず一発殴つといた。

九話（後書き）

玲衣蘭は楯無さんの指導により着々と実力を伸ばしています。
入学当初よりも、相当強くなっていますね。

十話（前書き）

でやあ一日にこんなに投稿できるのかー

直しました。名詞↓名刺

十話

今日も放課後は会長のところに行き、訓練をもらった。

今日は前日指摘されたところと、四つのスラスターを使つての瞬時加速、及び個別連続瞬時加速の練習だ。

会長はあんなんでも訓練に対しては厳しいところがあるから、緊張感をもつてやれて良い訓練になる。

今日は前日の指摘部分を意識しながらの会長との模擬戦。

当然のように負けてしまった。いや、シールドエネルギー大分削れるようになってるだけよくなってきたって事なんだろうけどさ。アレだ。昼間は『天叢雲』にエネルギー流して高温、高電圧を保つことによつてやつとあのヴェールが抜けるようになったんだよなあ。

やつと『八咫鳥』の稼働率も上がってきた。やっぱり、『八咫鳥』も自分のスペックを出し切れないで負けるなんてイヤだろうし、稼働率は上げられたら良いと思う。

結局、今日は四つのスラスターを使つての瞬時加速では制御し切れずに会長に突っ込み（その際に起きたことについては忘れる。アレは思い出しちゃいけないんだ。うん、アレはアクシデントなんだ。事故だ事故。）、個別連続瞬時加速の方も完璧にこなすことは出来なかったが、なんとなくコツがつかめてきたような気がする。

今のところ成功率は10%くらいだ。100にしないと実戦ではとても使えない。五月にあると言うクラス対抗戦が終われば、会長からの訓練は終わり、本格的に会長たちの手伝いそして一夏の護衛をしなければいけない。

確かに、考えれば考えるほど一夏は大変危ない位置にいる。今、一夏がこうしていられるのは一夏が織斑千冬の弟であり、篠ノ之束の知り合いであるがためなのだろう。織斑一夏に危害を加えたらこの二人を敵に回す。そんな奴、どの国が手を出すと言うんだ。絶対に、なにも関係がない一般人男性がISを使っていたら、とっくの当に人体実験されて大変なことになっている。

……もし、一夏が狙われたとしたら、それはどの国にも属していない完全なる暗部ということになる。だからこそ『更識』なのか。

だからはやく、ちからをつけなきゃいけない。
ちからがなきゃ、なにもできない。

訓練を終えて汗だくの体を、軽くアリーナのシャワーで流して部屋に向かう。
すると

「あー！レイレイいたー！もう、どこ行ってたのー？皆待ってるんだよ？」

「…へ？」

本音に捕まって連行された。行き先は進む方向からして食堂か。いや、腹減ってるから良いんだけど…皆って誰だ？谷本達か？ってかどこ行ってたってそれはオレの台詞だ。生徒会室に顔くらい出しに來いお前は。いつもいつもどこに居るかわかんねえし。毎日のように虚さんにお前の行方を聞かれるこっちの身にもなりやがれてんだ。

「みんなー！レイレイ連れてきたよー！」

と本音が大声で食堂にいる人たちに報告。

よくやった！だとかナイス！だとかいろいろ声が聞こえてくる。結構人数いるのか中に。

オレが食堂内に入ると、クラスの全員どころか恐らく2組の奴らまで集まってきていて、待ってましたとばかりに

「というわけでっ！織斑君クラス代表おめでと！」

「おめでと〜！」

ぱんぱーんとクラッカーが鳴った。クラッカーから出た紙の紐が一夏の頭にのって面白いことになっている。

…ああ、そういえばそんな話もしてた気がするな。一夏のクラス代表就任パーティーするっていうの。

そして、皆は思い思いの飲み物食べ物をもってやいのやいの騒いでいる。

「……」

一夏はまったく状況が読めず、まったくめでたくないぞ、と言う顔で壁に張ってある紙に書かれている『織斑一夏クラス代表就任パ-

ティー』の文字を見て溜息をついていた。

まあ、こいつなりたくてクラス代表になったわけじゃないからなー。ま、ドンマイって奴だ。

そんなことより腹が減った。なんか良い感じの食い物はねえのか。お、あんなところにフライドチキンがある。よっしゃ。

一夏の助けを求める視線を完全に無視してフライドチキンにかぶりつく。カリっとした衣とぱりっとした皮、中からあふれ出る肉汁にオレは満足だーうおおうめえ。

流石おばちゃん。良い仕事をする。フライドチキンも味わい食した後。次はご飯ものでも探そうか、とあたりを見渡したそのときだった。

「話題の新人生。織斑一夏君に特別インタビューしに来ましたー！」

なんだ、この人。カメラ首から下げてやがる。新聞部かなんかか？ テンションたけえなおい。

皆もテンション高くおおー！とかいつてんじゃないの。落ち着けお前ら。主賓がテンションだだ下がりにしてっから。

「あ、私は二年の^{まゆずみかおるこ}黛薫子。はいこれ名刺」

といって一夏に名刺を渡していた。

まゆずみかおるこ。多分漢字だと黛薫子とかだな。生徒会の仕事やってるときに確か新聞部の欄にこんな名前があったし。

なんで覚えてるかって？あの時「うっわこの人名前の画数多っ」って感じに印象深かったんだ。

「ではずばり織斑君。クラス代表になった感想を、どうぞ！」

黛さんはずっとボイスレコーダーを一夏に近づける。

一夏は自分からなつたわけじゃないから感想も何もないと思うんだが……？

と思ったところでおにぎり発見。おお、ご飯だ。何味あるかな？オレ、たらかことおかかと、最近では地味に卵かけご飯風系統好きなんだよな。

ま、流石に食堂のおにぎりに卵かけご飯風があるわけないか。大人しくおかかとたらか探しよう。

えーと、この列が昆布で隣がツナマヨ。更にその隣が鮭でまたその隣がふんふん、……『お楽しみ』？いや、お楽しみってなんだよ。ってかこれでおにぎり終わりか。うっわー、たらかもおかかもないとか萎えるわ。仕方ない。『お楽しみ』のなかにたらかおかかが入ってることを期待するしかないか。

そう思って、『お楽しみ』の列から一つ手にとってパクリと口に含む。

米の食感が嬉しいな。うんうん。因みに具は、ふむふむ口に入れた瞬間におにぎり内部の熱でとろけていたその具はオレの口の中にほのかな苦味と強烈な甘さを――

「って中身チョコじゃねーか！！」

なんでだよ！！何でおにぎりの中身が、具がチョコなんだよ！誰だよこんなこと考えた奴は！

あまりの衝撃に膝を折り地面にダンダンと手を打ち付ける。

そこではっ……と気がついた。

アレ？皆の視線オレに集まってね？ああ、そりゃあ突如あんな大声で叫んだ上に地面を叩き始めたら誰もが振り返りますよねーあはは……やっちゃった……。

落ち込むオレに本音が近寄り、声をかけてきた。

「もしかしてレイレイ『お楽しみ』おにぎり食べたのー？アレ、中に一個だけチョコ入ってるんだけどあったっちゃったー？」

「本音、まさかとは思うが：アレ、お前が主犯か？」

「そうだよー？私は本気を出したら出来る子なのだー」

そうかそうかと言いながらゆらりと立ち上がり、えっへんと胸を張る本音に近づく。

え？なにになに？どうしたのレイレイ。とかいつている本音に接近し

「い、いたたたたー！！！？ちょ、ちょっとやめ、やめてってばあー！！！」

「うっせえボケ！なんてもんおにぎりに仕込んでくれてんだてめえは！！！」

完璧なコブラツイストを極めてやる。

はっはっはっはーコレに懲りたらもう二度とおにぎりにチョコなんて突っ込まないようにするんだなー！！

「あ、あのー：雑賀玲衣蘭さん、よね？コメントと、写真を撮らせて頂きたいのだけれど：」

：はっ：！？今の状況に冷静に気づいたオレは本音を解放し黛さんに向きなおる。

「う、うあははい！よ、よろこんでー！」

冷や汗をだらだら流しながらの返答。

もうどうにでもなればいいんじゃないかねーかと本気で思った。

「はいはい。じゃあ三人並んでね。写真撮るから」
「えっ？」

その声はセシリアのもので、「ああ、三人なのか。」と言う落胆と、一夏と写真が撮れるという喜びが入り混じった声だった。

「注目の専用機持ちだからねー。スリーショットもらうよ。あ、握手とかしてといいかもね」

「そ、そうですか……。そう、ですわね」

「オレは一夏と握手しねーからな。」

それでも、やっぱり握手できると聞いて、嬉しいみたいで声に喜びの色が多く入ってきた。乙女だな。

「あの、写真は、当然いただけますわよね？」

あ、こいつオレの部分切り取る気だな。んでツーショット捏造する気だ。オレには理解できん。

「そりゃあもちろん」

「でしたら、今すぐ着替えて——」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

やっぱりわからんな。

黛さんは一夏とセシリアの手を強引に繋がせた。

「……………」

「? なんだよ?」

「べ、別に、何でもありませんわ」

セシリア。ちらちら見るくらいじゃそいつは絶対にお前の思いには
気づかんぞ。唐変木の鏡だからな。

「……………」

「なんだよ、箒」

「何でもない」

箒。ちらちら (ry

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は?」

なんでそんなめんどくさい計算なんだよ。普通1+1は?とかだろ。

「え? えっと、……2?」

「:74・375」

「正解は74・375でしたー」

ぱしゃつとカメラのシャッターが切られる。オレの答えであつた
みたいだ。

ってアレ?

「「なんで、全員入ってるんだ?」」

いつの間にかパーティー参加者が全員はいつてた。箒まで何やって
んだお前。いや、箒はセシリアの妨害をしたかったのか。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

口々にセシリアを丸め込むような台詞をいうクラスメイトたち。
はあ、こいつら元気だな…。

そして、オレはこの年代の女子の元氣を読み違え、結局10時あたりまで続いたパーティーに参加し続けることになったのだった。

パーティーの帰り、本音と二人きりで話す。

「はあ…つつかれたー。女子ってこんなに元氣あるもんなのか」

「えー？レイレイも女子だよ？」

「そこはアレだ。オレどっちかってーと男子に近いから。」

そういえば、まだシャワー浴びただけなんだよなー。部屋に入ったら、体洗わなきゃな。ああ、そろそろ予習も始めたほうが良いのか。うわ、やらなきゃいけないこと、これからどんどん増えていくんだよな。

生徒会の活動とかもあるし、とそこまで考えたときにはたと気づい

た。

「なあ、本音。お前、いつも放課後何してんだよ。虚さん心配してたぞ？」

「え？あーそっかー。たっちゃんがお姉ちゃんに言っていないのかな」
「は？会長がなんで出てくんだよ」

話がよくわからん。本音の行方がわからない話と会長に何の関係があるんだ。

「あのねー、私はたっちゃんからレイレイが特訓を終えるまでおりむーの観察を言い渡されているのだー」

流石私。仕事の出来る子ー。といって胸を張る本音。

なるほど、そういうことか。しかも会長のあの性格からして虚さんに教えていないのは虚さんの心配する顔が見たかっただけと思われる。

「はあ：そういうことはちゃんと虚さんに言っとけよ」

「わかったー。後でメールするね」

と、そこまで言ったところで部屋に到着。鍵を開けて中に入る。

一夏と箒の部屋の隣。それがオレの部屋1026室。

あんまり意識してなかったんだけど、一夏って箒と同室なんだよな。男女で同じ部屋なんだよな。

「ところで、気になったんだけどさ」

「なにになに？この本音さんが答えてしんぜようー」

いや、多分答えられないと思うんだけど。ってか本音さんってお前。

…まあいいや、どうせもとから答えてもらう気じゃなかったし。

「いや、一夏って男の朝の生理現象とか来たらどうすんのかなー、
と思っで。」

「いや、それは……たしかに部屋にトイレもないけど……」

そのまま沈黙が続く。疑問は解決しないようだ。しかもコレは流石
に本人に聞けないだろ。

ま、いいや。とりあえず体洗おう。それから、歯あ磨いて寝よう。

疲れた体を引きずって、オレはシャワー室の中に入っていった。

十話（後書き）

いや、最後の疑問は実際自分が気になってることなんですよね。
誰かわかりますか↑

十一話（前書き）

部活の勧誘ポスター書いてたりしてたら投稿遅れました。

『楽しい部活でぽぽぽーん!!』

さあ今年は一体何人がだまされてこのクソめんどくさい部活に入ってしまうのだろうかwwww

因みに弓道部です。

十一話

「はよ、一夏。ところで、転入生の噂って聞いたか？」

まあ、聞いたか？とか言ってるわりにオレも今朝本音達から聞いた話なんだけどさ。

「転校生？今の時期に？」

まあ、ここ転入してくるのってムズイらしいからな。国の推薦とかいるし、一夏の疑問ももつともだ。

「そ。なんでも中国の代表候補生なんだってよ」

「へー」

興味なさそうに聞いてんなー、一夏の奴。ここまで聞いたらわかりそうなんなんだが。

いや、明らかに2組のクラス代表変わるだろ。相手が『一般人の中で強いほう』から『代表候補生』になるんだから一気に難易度が上がるんだぞ？気づいてないなこいつ。

「案外、お前の知り合いだったりしてな」

「いや、流石にそれはないだろう」

それがそうとも言えないんだよなー。ほら、そこは一夏だから。

アレだ。国のほうも一夏の知り合いがいたらこっちに送ろうとするかもしれないし。いや、まず一夏に中国の友達がいないと話が始まらないのか。

んで、代表候補生という言葉に反応してやってきたのが

「あら、わたくしの存在を今更危ぶんでの転入かしら」

セシリア。腰に手を当てるといふ基本的に日本人がやっても背伸びするだけの結果になるポーズを見事に決められるイギリス代表候補生。

いや、一夏の存在を危ぶんでだから。あ、でも他の国に取られないようにって意味ではあってんのか？

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐ程の事でもあるまい」

と言いながらクラスの端っこの席からわざわざ話に参加しに来たのは篠ノ之箒。おおう。言ってることとやってることがちよっぴりあってないぞお前。

「どんなやつなんだろうな」

「オレは中国人の女に1000円」

「賭けにならないだろそれ」

ちいっ。ばれたか。

「む……気になるのか？」

「ん？少しはな」

「ふん……」

あららら。篠ノ之の機嫌が下がっちゃった。一夏ー？他の女の話篠ノ之の前でしないほうがいいぞー。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス

対抗戦があるというのに」

「いやでも——」

いやでも多分その転入生2組のクラス代表になるぞ。と言おうとしたところを篠ノ之に『黙ってろ』と目で威嚇された。

えええー？

「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けてより実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし。セシリア・オルコットが務めさせていただけますわ。何せ、専用機を持っているのはこのクラスでわたくしと一夏さんだけですし」

「オレを無視するな、セシリア。一応現段階でこのクラス最強ってオレなんだからな」

「うっ…それは…」

セシリアが言葉に詰まっている。まあ全部事実だしな。反論は出来ない筈。クラス最強だけは譲らんぞ。

でも、まあオレの出番はクラス対抗戦の後らしいし。

「ま、オレはクラス代表戦の後くらいまで放課後予定あるから今んとこ一夏とそういうことできるのセシリアだけなんだよな。」

助け舟でも出してやるか。ほら、友達だしな。

セシリアの目が輝いてるぜ。良い顔してるなコイツ。

「そ、そう！そういうことなのですわ！！」

おお、セシリアのやろうすっげえ嬉しそう。逆に篠ノ之からの視線がきつくなってきたー。良いだろお前。ちよっとくらい。お前一夏と同室なんだし。訓練くらいセシリアにやらせてやれよ。

器量の狭い女は嫌われるんだぞ？

「まあ、やれるだけやってみるか」

「一夏、やるなら勝て。負けたりなんかすんじゃねーぞ」

「負けてもらっては困りますわ！一夏さんには勝っていたただかないと」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でそうする」

「織斑君が勝つと、クラスみんなが幸せだよ！」

そう。そうなのだ。

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

フリーパス。優勝クラスの全員に配られる学食のデザート半年フリーパス。オレもコレが欲しい。

え？ああ、甘いモン好きなのかって？好きだ。おお、好きだとも。

特に学食デザートではフォンダンショコラが。

アレはやバイ。熱々の生地の中にほんっとうにとろとろしたチョコが入ってて一緒に食ってくる冷たいバニラアイス（onカシスソース）と一緒に食べると口の中であああああ

今度作ろう。うん。

おっと、話を戻さなきゃな。

ええっと、クラス代表の話からどうなってたんだっけな。

「今の所専用ISを持つてるクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

お？お、おお。思い出した思い出した。そうだそうだ。フリーパス

って誰かが言ったところから考えが脱線し始めたんだ。
一夏が女子の勢いに押されながらも「おう」と返事をしていた。
そのときだった。

「――その情報、古いよ」

教室の入り口。そこから声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったから、そう簡単には優勝できないわよ？」

その声の人物は腕を組み、片膝を立ててドアに寄りかかっていた。
この自信に満ちた表情。ってことはコイツが転入生で2組の新クラス代表か。なるほど、確かに雰囲気がある。

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

そいつが壁から体を浮かし、ツインテールが揺れる。
うっわあ冗談で言ったつもりだったのにマジで知り合いかよ。

「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

あ、一気に雰囲気飛んでった。演技か。格好付けか。中二病なのかあ。娘は。可愛そうに。

ってか織斑先生来たな。オレ席着いてよっと。

因みに2組の新代表、凰鈴音は後ろからやってきた織斑先生に「邪

魔だ。」と言われてビビりながらすごすと自分のクラスに戻っていった。

一夏の知り合いって事は、織斑先生にも以前から面識があるんだろう。初対面にしてはあのビビり方はおかしい。

しかもアイツは最後に『覚えてなさいよ!!』と捨て台詞を残していった。(まあ正確にはその前に、『一夏! また後で来るからね!』がつくんだけど)

そして一夏はその後やってきた箒とセシリアに『あの女は何なんだ』と問い詰められあわわわしてるうちに三人とも出席簿アタックを食らっていた。

因みに、その後の授業では午前中だけで箒、セシリア共にやまや先生から注意五回、織斑先生から出席簿アタック三回を食らっていたことをここに記しておこう。

そして昼休み。

一夏、箒、セシリアは食堂へ行った。

オレは今日は用事があると言って一緒には行かなかった。別に用事があるのは本当なんだけどな。

「ほら、行くぞ本音」

「あいあいさー」

びしっとなるはずの敬礼をへろーっつとやっている本音の腕をつかみ、本音とオレの弁当を持ってオレ達は生徒会室へ向かった。

生徒会室に着くと、そこには既に会長と虚さんがいて（まあ動こうとしない本音を引っ張りながら来たから送れて当然なんだが）、会長はやっほーと手を振り、虚さんは本音をつれてきてくれてありがとう、と言いながら自らの席についていった。

今日は『このメンバーで話があるから、とりあえず明日はお昼ごはんを持って生徒会室に来てね』との話だったからこの状況なんだが……まあとりあえず席に着こう。

本音も席についたところでオレが本題を切り出す。

「会長、話ってなんですか」

「まあ、それは置いという。れいちゃんのお弁当でもしかして手作り？」

いや、話するために呼んだんじゃないのかこの人は。置いとくなよ。

「そうだよー！レイレイって見かけによらず料理すっごい上手なんだよね。いつもお菓子作ってくれるんだー」

「いや、本人よりも前に答えんなよお前。間違っちゃいないが」

オレは呆れながらも本音にツッコむ。

そう、間違っちゃいない。こんななりしてるが、オレは料理は得意だし好きだ。食べるのが好きだからな。いろいろ作って食ってたら得意になったってとこか。

甘いもん好きだからお菓子だって作れる。まあだからこそ毎日のように本音に作れ作れとせがまれる訳なんだが。

と、そんなことを思いながら弁当を開けた。

中身は、一個目…白米　二個目…アスパラのベーコン^{タッパ}巻き、から揚げ、鳥の照り焼き、ハンバーグ（ミニサイズ）　三個目…サラダだ。量が多い？いや、腹が減るんだから仕方ない。

あ、冷凍食品なんて一個もないからな。

「わあ…」

「あら、」

因みに上から虚さんと会長である。

「「意外ね」「でしょー？」

「だと思いましたよコンチクショウ！」

絶対料理できないと思ってただろこの人達！本音が上手だって言っただの何も信じてなかっただろ！！

「…はあ。まあいいですよ、その辺自覚はあるんで。とりあえず食べませんか？」

そうね、と会長が返事をして、『いただきます』の合図で皆いっせいに食べ始めた。

のだが。

「れいちゃん、その照り焼きおいしそうね」

「はいはい。一切れとってって下さい」

「わーい」

やら

「じいー……」

「あー…、虚さん。から揚げ気になるなら一個持ってっていいですよ」

「い、いいの？ありがとうございます」

やら

「ねね、レイレイ。デザートは？」

「あるか、馬鹿」

ゴスッ

「あうー、レイレイがいじめるー！」

とかがあつて、ランチタイムは流れていった。

うん、今日も飯がうまい。

皆が食べ終わって一息ついたころ。

「さて、本題に入るのだけど」

あ、完っ全に忘れてた。

そうだ、本題。話があるっていうことで呼ばれてたんだよな。オレ。

「そうでしたね。話ってなんですか？」

「もう、せかさないの。せっかちな子は嫌われちゃうのよ？」

「はいはい。わかりましたよ」

別に一夏が好きなアイツらじゃないんだからこの手の文句オレになんの関係もないんだよな。ツてかまず自分でオレが誰かを好きになるところが想像できん。

「今度のクラス対抗戦。一般の人もたくさん来る分、全体的な警備が薄くなってしまう可能性があるの。不足の事態にもそなえなくちゃいけないし…ね？」

「手伝えってことですか」

「そういうこと♪お願いできないかしら？」

はあ、この人は。別にそんな言い方しなくていいんだけどな。この人にオレが勝つまで、それかこの人がここを卒業するまで（それまでにこの人に勝つ気でいるから出来ればコレはなしがいいんだが）オレはこの人の下につくんだ。

だから、もっと命令形でいいんだけどな。
ん？待てよ？

「ところで、それ拒否権って——」

「あは、ないよ」

ちょっと上がりかけた評価が元通りになったな。ああ、そうだこの人はこういう人だ。

でも、まあ仲間ってか部下扱いしてくれるんなら嬉しいんじゃないかねえの？一ヶ月近くの付き合いでまだ扱いが他人だったらそれはそれで悲しい。

「じゃあ、オレは当日何すればいいんですか？」

「んふ、レイちゃんにはね——」

そこで時間は流れ試合当日。

あの日から今日までに一夏と凰鈴音の仲が一晩で急に悪くなったり（隣の部屋で全部聞こえてたんだが）、その次の日に張り出されたクラス対抗戦のうちのクラス最初の試合が2組で相手が凰鈴音だとか、一夏が凰鈴音に禁句（オレは知らない）を言ったらしく更に仲が悪くなっていたりとか色々あったのだが（オレはその間大会会長に訓練つけてもらってた。ここ一週間はアリーナが調整中で使えなかったから格闘訓練な。あのころのオレとは違うぜ。…って一回言ってみたかっただけなんだが）オレは基本特に凰鈴音と深い付き合いでもないから応援するのは一夏だ。

詳細を知っていたら凰鈴音に味方するかもしれないんだが…：まあオレもフリーパスが欲しい身だ。一夏には勝ってもらわないと。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください。』

アナウンスが流れ、一夏がアリーナの中に入り既に規定の位置で待っていた凰鈴音と向かい合う。その距離は5m。

そこで、もう一度アナウンスが流れる。

『なお、今回のクラス対抗戦では不測の事態に備え、アリーナ内に光学迷彩とステルスモードを使用した生徒会本部役員が控えております。』

因みに、コレがオレ。元から光学迷彩はついてたから別にいいんだけどな。まあ、なんで光学迷彩なんてつけてるのかは知らないんだけど、何でも製作者の一人の願望らしい。誰だよそいつ。

光学迷彩すると色的な問題であんまりエネルギー貯まなんからイヤなんだけどな。ほんと、何でつけたんだろ。

ってか、IS学園に襲撃してくる奴なんていないと思うから、不測の事態ってのは勝負が決まった後に追撃を仕掛けるとかそんな感じだろうか。

流石にそれはないと……この二人ならありえそうだなあ……。勝負が決まった後に一夏が余計な一言とか言ったらなりそうだな。

「今謝るなら、少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ、全力で来い」

「一応言っておくけど絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

「わかってる」

オープンチャンネル

開放回線で会話してるから、ばっちりこっちまで聞こえてくる。

あいつ、そんな脅しをして殺さない程度にいたぶるつもりなんだろうか。そうになったら止めに入るしかないのか？

と、いかさそういうことを言うってことは『シールドを突破する攻撃力』ってのをあの機体が持つてるんだろうな。

『それでは両者、試合を開始してください！』

試合が始まった瞬間、二人が動いた。

クロス・グリッド・ターン

凰の初撃を一夏は防ぐ。へえ、アイツ三次元躍動旋回出来るようになったのか。多分教えたのはセシリアだな。

そうして一夏は凰の正面に立つ。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。でも――」

凰がその手に持つ異形の青竜刀をバトンのように振り回し切りかかる。一夏はそれをさばくだけでも精一杯といった様子だ。このままだと、一発食らうな。

「——甘いっ!!」

その言葉と共に、凰のIS『シエンロン甲龍』の特徴的な肩アーマー部分が横にスライドする。

そして中心の球体が光った瞬間一夏は何かに『殴り』飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

そして、ドンっと言う音と共に一夏は地面に叩きつけられた。

——あれが、『衝撃砲』か。

以前、中国がISに『衝撃砲』なるものを搭載させる気であると話に聞いた。そのときは、『衝撃砲』と言う名前だけでこういうものがよくわからなかったのだが。

最近になってようやくわかったのだ。

確かに、『衝撃』の『砲』だな。弾丸は衝撃、砲身は空間に圧力をかけて形成。砲身も、砲弾も、まるで見えない。

しかも、見えている限り砲身斜角はほぼ制限なし。乗っている操縦者も、無制限機動と全方位への軸反転、基礎の全てを高いレベルで習得しているように見える。

なるほどコイツは強敵だ。ま、代表候補生だから強敵ってことはわかりきってたんだけどな。

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

本当に感心した様子で、凰は言う。

一夏は、おそらく今はハイパーセンサーに大気の流れや空間の歪み値を探らせて避けているのだろう。

それ以外に今の一夏に避ける方法ないと思うしな。

オレだったら、まあ見てて連射は出来ないみたいだから、正面から衝撃を『天岩戸』で受け流してすべるように一旦懐に入ってみるな。うん。

一夏は『天岩戸』見たいのがないから避けるか受けるかの二択なんだよな。雪片式型じゃ受け流せないし。

一夏は無言で通している。多分、どうやって勝つか考えてるんだろうな。諦めねえのはいいことだ。頑張れ、フリーパスのために。

一夏が考えを決めたみたいだ。顔に表れやすいからな、アイツ。

「鈴」

「なによ？」

「本気でいくからな」

そう言った一夏の顔は、いつもの顔よりも真剣で。

「な、なによ。そんなの当たり前じゃない……と、とにかく、格の違いつてのを見せてあげるわよ！」

一夏のことを好きな女子がそんなの見せられたらたまないんだろうなー、とニヤニヤしながらその後の経緯を見ていたのが悪かったのかもしれない。

凰は青竜刀をグルンと一回転させ構えなおす。

そして一夏が使ったのは——瞬時加速！？そんなのいつ身につけたんだアイツ！？

そして、一夏が瞬時加速と言う技能を使ったことに驚いて、一瞬そっちに意識がいったのも悪かったんだと思う。

一夏が瞬時加速で風に迫り、後一步で攻撃が届く。その瞬間、ことは起きた。起きてしまった。

ズドオオオオオオオオオオン！！

アリーナ全体にまで衝撃がいきわたる。最悪の事態だ。アリーナの遮断シールドのど真ん中をぶち破って『ソイツ』は来たらしい。光学迷彩を切る。

ああ、いい天気だ。太陽が空に輝いている。

会長から、プライベートチャンネルがつけられる。

『三年の精鋭でシステムクラックをするから、部隊が到着するまであの二人を守りなさい。』

なるほど。遮断シールドも扉もあのISにやられたか。

でも、まあやるしかないな。ああ、あと

『それはいいですが——別に倒してしまってもいいんですよ？』
『——そうね。出来るならそれでかまわない、やっちゃっていいわよ』

『了解しました、会長』

あちらに向けて飛びながらの会話。くそっ、アリーナの端にいたか

らあそこまでに少し時間がかかる。その少しが今は重要だって言うのに。

「お前はどうするんだよ!?!」

「あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

あいつらオープンチャンネルで怒鳴りあうなよなー! めちゃくちゃ耳に響く。

「つてか、生徒会本部役員ってのはどこに――」

いるのよ。とつなげようとした風の前に出る。

「ここにいるさ。すまん、待たせた」

背中に突き刺さる二人の視線。二人の顔はハイパーセンサーでバツチリ見えている。面白い顔しやがって。

「あ、あんた一組の――」

「――レイ、レイなのか!?!」

その言葉と共に、オレは『ソイツ』に突っ込んでいった。

十一話（後書き）

え？ああ、F a t e好きですよ自分。F A T E×I Sとかガン見してますよね。

誤字脱字あったら感想へお願いします。

十二話

「え————」

「凰!! 避ける!!」

『ソイツ』のISから熱線攻撃が放たれ、凰に向かう。まずい。オレじゃ間に合わないっ!

「あぶねえっ!!」

しかしそこを間一髪、一夏が凰を『お姫様抱っこ』して抱えさう。そしてその一瞬後、凰のいた場所を熱線が通過した。

「おいおい、ビーム兵器かよ。アレは第何世代だ…?」

「しかもセシリアのISよりも出力が上だ。」

え、まじで。マジでだ。…うわっマジだ。とか言うやり取りをしながらあの『全身装甲』を睨む。

「ちよっ、ちよっと! 離しなさいよ! だ、だいたいどこ触って——」

凰が一夏をポカポカならぬダダダッマシンガンのごとき連射速度で殴っていたのだが、その瞬間に

「二人とも、遊ぶのは後だ。来るぞ。」

着地の際に上がった土煙を晴らすかのようにビームが連射される。

それら全てをかわし、一夏達の方に向かったものは『天岩戸』で上方へ受け流す。

煙が晴れたときにそこにいたIS。

それは今の時代からしたら異形としか呼べないもので

腕が長い。自らの足よりも下まで行くなんて普通じゃありえない構造だ。

首がない。肩と頭が一体化したようになっている。コレも普通じゃありえない。

腕を入れると2mを超える巨体。全身に見える姿勢制御のためのスラストー口。頭部に不規則に並ぶむき出しのセンサーレンズ。腕につけられた四つのビーム砲口。

そして、なにより

「フルスキン全身装甲…だと…!? 何モンだてめえ。答えろ!!」

オレの言葉に、ソイツは無言と言う答えで返した。

全身装甲、なんてISには必要ない。それこそ、乗っているものの正体をどんなにも明かしたくないか。それぐらいにしか必要ない。つまり、あの中には「見られては、知られてはいけない誰か」が乗っていることになる。

『織斑君! 凰さん! 今すぐアリーナから脱出してください!! すぐに先生たちがISで制圧に行きます!』

やまや先生の声が届く。

「おい一夏、凰。そういうことだ。お前らはとっとと脱出しろ」

「レイはどうするんだよ」

「オレはここでアイツを食い止めたりする。」

正直倒す気満々なんだが。両腕の先くらいなら切っても中の人大丈夫だよな。うん。

「いや——先生。雑賀さんだけに任せるわけにはいきません。俺たちも残ります。」

「は」

いや、そこは帰れよ。お前の命が今この場にいる誰よりも重要視されてんだよ。と思いながら一夏の顔を見る。

一夏の顔は、いつになく真剣だった。

おいおい、その顔を箒たちに見せてやれよ。きっとあいつら今よりもっとお前に惚れるからさ。

「いいな、鈴」

「だ、誰に言ってるのよ。それより早く離しなさいよっ！」

「ああ、悪い」

『お、織斑君！？だめですよ！生徒にもしものことがあったら——』

オレはそのとき、織斑先生にプライベートチャンネルを繋いでいた。

『はあ…織斑先生、安心して下さい。会長からの命令があります。』

絶対に————二人とも守りますから』

『——ああ、頼んだ。』

他でもない織斑先生からも頼まれたんだ。ここは頑張りどころだね。

「一夏、凰。」

「鈴でいいわ」

「そうか、じゃあオレもレイでいい。一夏、鈴。——構えろ、来るぞ」

その言葉と同時に、『全身装甲』がこっちに突っ込んでくる。

狙いは——一夏だ。けど一夏だってそれくらいは避けられる。

コイツは一夏が狙いなのか？それとも違うのか？

「ふん。向こうはやる気みたいね」

「ああ。」

「みたいだな」

鈴、オレ、一夏の順で横に並び、それぞれ獲物を構える。

「オレが突っ込む。鈴は援護。一夏は隙を見て一撃を決めろ」

「わかったわよ」

「了解」

流石の鈴も突っ込むにはシールドエネルギーが残ってる奴が良いと思っただのか反論はない。

それに、一撃を決めるには『雪片式型』が最適だ。

「行くぞ」

「おう！」 「ええ！」

こうして、オレ達は即席コンビネーションで行動を始めた。

まず、オレが突っ込む。『二人を守る』とか言ってたのはなんだ。と言われるかもしれないが、今あの二人にはそれぞれ一枚ずつ『天岩戸』をつけている。

そのせいでオレは今ビームを避けるしかなくなってるわけなんだが、それよりもなによりも

上にも遮断シールド張られて『八尺瓊勾玉』がエネルギーを集めるのが遅いつてのが厳しい。アレがないと一撃の威力が出しづらいんだよな。

とにかく、ビームなんて恐がってたら前に進めるモンも進めない。紙一重でするりと最短距離を突っ走り接近。『天叢雲』を振るう、が

相手はその全身についたスラスターで急稼動し、避けられてしまう。ちいっ！なんて機動しやがる！

今度は二つの『八咫鏡』を牽制に、逃げ場をなくし上段で切りかかるが

バシユッ

とスラスター音を鳴らしながら急降下。更にその下に構えていた一夏の太刀もスラスターで横に逃げてしまった。

あんなの、人間が乗っているときにやれる機動じゃない。いくら縦者保護プログラムがあるとはいえ、あの急激なGは体に負担をか

けすぎる。

中の人が腹の中のものを気持ち悪さでぶちまけても良いような機動をしている。

しかも、オレや鈴がどんなに攻めて注意を引いても、一夏の攻撃にも反応しスラスターを吹かして逃げてしまうのだ。

そして、避けた後には必ず、そう必ず反撃してくる。しかもその方法が長い腕を伸ばしたまま回転して接近。その上でビームまで撃ってくるというもので。

「お前はどこの格闘ゲームに出る気なんだ」と言いたくなる。

はあ…だめだ。この一ヶ月、やってきたことを思い出せ。全てを出し尽くしてでもこの相手に勝たないと。二人を守らないと。勝たないといけない。

「大人しく食らえよおっ!!」

『天叢雲』を横に構えた状態でスラスター4つの瞬時加速を使い、文字通り一瞬で『全身装甲』に迫る。

相手の反応よりも速く。狙うはあの腕。見たところあいつは今ビーム以外に出してきていない。落とすならあの腕だ。

ガキイン!!

しかし、それはアイツのシールドバリアーに阻まれる。

ちいっ。やはり攻撃に転換させられるエネルギーが少ないな…! シールドバリアを抜けない…。まだ『八尺瓊勾玉』はエネルギーを集

め終わらない。

一夏がシールドバリアを破壊してくれば何とかなるんだが、アイツは一夏の攻撃にだけは何か何でも当たってくれないからな。

そんな時、一夏が言葉を発した。

「なあ：アイツの動きって何かに似てないか：？」

「：コマなんて言うんじゃないでしょうね」

何かに、似てる？アイツの動きが？あの、『まるで人じゃないかのような』動きをするISが？

「そうじゃなくて：なんていうか、その、昔見た人型ロボットみたいな：：：なんつーか」

「機械じみた動きをしているってことか、一夏」

「そう、それだ」

「ISは機械よ」

違う。そうじゃない。一夏が言いたいのとはそんなことじゃないはず。喉元まで出てきているその答えが出ない。もどかしい。

「違う、そうじゃなくてその：あれって、本当に人が乗ってるのか？」

いや、まさか。人が乗っていないなんてありえない。この考えは、最近までロクにISについて知らなかった一夏だからこそ出る意見だ。

「はあ？何言ってるのよ。ISは人が乗らなきゃ動かな——そういえば、アイツあたし達が話してるときって、攻撃しないわよね。」

まるで興味があるみたいに聞してる」

今までの戦闘を思い返す鈴の真剣な顔。オレも、今までの戦闘で人が乗っていないと仮定したほうがうまく説明できる部分はたくさんある。

あの無茶な機動だとか、あのやけに長い腕だとか、反撃の方法が常に一つのところだとか。
だが。

「——でも、『無人機』なんてありえない。『人が乗らないと動かない』。ISはそういうものだもの」

だけど、もし。もしコレが『無人機』だったら。無人機は既に可能になっていて、どこかの研究所がひた隠しにしていただけだったら。答えがずっと入ってきた。

「『ありえないことはありえない』。おい、一夏。お前はもしも、もしもコレが無人機だったら——勝算はあるのか」

因みに、オレはある。もうずいぶん時間が経った。『八尺瓊勾玉』も一枚が今上から降りてきたところだ。

だから、『アレ』が使える。『アレ』はエネルギーが大きすぎて普段は使ってはいけなから。中に乗っている操縦者まで傷つけてしまうから。

『無人機』なら、それが使える。

「ああ。無人機なら、人が乗っていないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だろうしな」

なるほど、一夏にもそういう手があると見た。

「オレも同意見だ。一発かましてやろうぜ一夏」
「おう」

お互い、ISを纏ったままで拳と拳をぶつける。一夏がいい表情をしている。

「はあ：レイはいいとして、一夏。あんたはまずその攻撃が当たらないでしようが。」

「次は当てるさ」
「言い切ったわね。じゃあ、そんなことはありえないけどアレが無人機だって仮定で攻めましょうか」

鈴はにやりと笑って、『二人とも、そっちのほうが都合が良いんでしょ?』と振り返ってきた。
オレと一夏は力強くうなづく。

因みに、一夏の作戦はこうだ。（実際に聞いてないから一夏が鈴に言ったことからの予測なんだが）

鈴が『全身装甲』にむけて最大威力の衝撃砲を放ち、それを背に受けて一夏が瞬時加速。さらに『零落白夜』を使用しシールドを破壊してあのISに雪片を届かせる。と。

それに、あの辺にセシリアいるのはわかるから、詰めはセシリアにやらせる気か、コイツ。

なるほど。瞬時加速をそうやって威力を上げるとは。なるほど参考になる。うんうん。

ま、今回はコイツに華を譲ってやろうかな。あんまり奥の手を見せ

るもんじゃないし。

そして一夏が早速その作戦をやるうといったところで

「一夏あっ!」

キィィィィィィィィィンとハウリングの響くその声は箒のものだった。

「な、何してるんだお前…?」

一夏がそういうのも無理はない。箒の足元には審判とナレーターが伸びているから、おそらくぶっ倒してマイクを奪ったのだろう。

「男なら…男ならそれくらいの敵に勝てなくてどうする!!」

また、ハウリングが響く。おいおい、そんなこと堂々としてると織斑先生にあとでどやされるぞ。あと、危ねえ。

と思って意識を『全身装甲』に向ける。

「……………」

——まずいな。箒が狙われる。

「一夏あっ!!」

今度はオレが叫ぶ番だ。

「わかってる! 鈴、やれ!」

「わ、わかったわよ!」

そして、鈴は衝撃砲を放とうと構え、最大威力を出すための補佐用力場展開翼が後方に広がった。
そして一夏がその射線上に移動する。

「何してんのよ馬鹿あ！どきなさいよ！」

「いいから撃て！！」

「ああもう、どうなっても知らないわよ！！」

そして鈴が放った衝撃砲のエネルギーを利用し、一夏は瞬時加速を発動した。

「——オオオッ！」

雪片式型が強く光を放ち、一夏の単一使用能力『零落白夜』が発動する。

一夏はそうして、『全身装甲』の右腕を切り落とした。

が、一夏はその反撃を受ける。

はずだった。少なくとも『全身装甲』の方はそう思っていたに違いない。

『全身装甲』が反撃に振るった左腕は、二機の間絶妙なタイミングで滑り込ませた『天岩戸』で防ぐことに成功した。が、そのせいで『天岩戸』が吹き飛ばされてしまった。

因みに『天岩戸』は今までも、二人は気づいていないかもしれないが二人に行きそうな攻撃を受け流して別の方向に行かせ続けていたのだ。

このままだとこの近距離でビーム砲撃を受けると気づいた一夏だが、

全力での一撃で体勢が崩れていて動けない。

「「一夏ッ」」

箒と鈴の音が響く。が、今ので遮断シールドは破壊した。

「狙いは？」

「完璧ですわ！」

そして、ブルーティアーズの四機同時狙撃が着弾する。

ボンッという音を鳴らし、『全身装甲』は地表へと落ちていった。

一夏、鈴、箒、セシリアは『終わった、よかった』という顔をしているが、オレはまだ不安が残っている。

もし、無人機だったら。だったら左腕を切り落としても、どこか一箇所がだめになっても動き続けることが可能ではないのか。

杞憂で、終わってくればそれで良い。

予感程度だ。オレ一人準備していれば事足りる。そう思い、オレはこのISの真の第三世代機としての象徴『IS内での熱核融合（名称は天照）』を静かに発動させはじめ、準備をする。

「ふう、なんにしてもこれで終わ——」

予感は、当たったらしい。

ハイパーセンサーが『全身装甲』の再起動を確認する。

油断なく構えていたオレは、誰よりも速く動くことが出来た。

『天照』を発動したことにより得たエネルギーは全て『天叢雲』にまわす。『天叢雲』は稼働率が上がったことにより、エネルギーを込めると高熱を持つようになった。これだけのエネルギーを突っ込

めば、鉄も一瞬で気化する温度にまであがる。

さっき、『八尺瓊勾玉』から得たエネルギーは全て推進力へ。今出来る全力、スラスタ―四基による個別連続瞬時加速を発動。自分の背後に『天岩戸』を二枚並べ、一夏を狙うビームの中に突っ込む。自分の前に『天岩戸』を展開しないのは、それをするスピードが下がるからだ。

そして、まばゆい光の中、オレは確かに『全身装甲』を切った手応えを感じた――

十二話（後書き）

思ったよりレイが活躍してないのはほら、アレですよ。

『天岩戸』で自分じゃない二人に対する攻撃を防ぎながら自分も避けるのは流石にきつかった。ツてことでお願いします（だらだら）。

あと、『八咫鏡』いらない子とか言わないでねっ！あの子は牽制用だから今回使えなかったただけだから！

十三話

『お、お前は何を考えているんだ!!』

「うあ……ッ?……っう……」

いきなりの大声に、オレは呼び起こされた。そして体を起こしたとき、体に走る痛みに一瞬悶える。

知らない天井だ……。じゃなくて。えーとここは白いカーテン、ベットが置いてあり漂う香りは薬品のもの――

「――保健室か」

口に出して状況を整理する。そうでもしなきゃ混乱してしまいそう。因みに声は箒のだな。隣に一夏でもいいんのかな?

「あの後、どうなったんだ?」

再起動した『全身装甲』が一夏を狙って放ったビームの中に突っ込んで『天叢雲』を振るったのは覚えている。あの手応えも覚えている。そしてそこからの記憶がない。

なるほど、あそこで気絶したのか。いや、よく気絶と全身打撲ですんだものだ。

右手にはまる『八咫鳥』を見る。こいつが助けてくれたんだな。

(……ありがとな)

「ああ、雑賀。お前も起きたか」

「え？ ああ、はい。バッチリです？」

そんな時、織斑先生がシャツとカーテンを開けて入ってきた。

まあ気絶したのはISの操縦者保護プログラムのうちの一つ『ダメージ過多の時の強制ブラックアウト』のおかげ…なのか？

『し、してない！ 誰がお前の心配などするものか！』

身体的に死ぬことはないといえ、トラウマになったりするような事を防止するためのプログラムだ。おう、まあちまちましたダメージじゃなくて今回みたいに一遍にたくさんのダメージみたいなのじゃなきゃ発動しないんだけどな。

『と、とにかくだ！——訓練の——これからも——いいな！？』

箒声でけえな。

「どこがバッチリだ、お前。ビームがシールドを貫いて、絶対防御の効かない部分が酷い打撲だ。」

「うっわあ…。」

「まあ、なんにせよ無事でよかった。大事な教え子で、弟の恩人だからな」

あ、織斑先生って教え子のことちゃんと大事って思ってたんだ。よかった。

バシン！

「お前、今何か失礼なこと考えていただろう」

「………滅相もございません」

なぜわかれた。

「では、私は仕事へ戻る。お前も、戻る気になったら戻って良いぞ」
「はい。了解しました。」

そういつて、織斑先生はスタスタと保健室を出て行った。その途中で、バシンバシン！という音の後に『ここは保健室だ。静かにしろ』と、隣で聞こえた。

織斑先生が出て行った後しばらくして、背中に衝撃砲を自ら食らいにいったマゾ一夏の顔でも拝んでやろうかと思いいカーテンをシャツつと開けると

「……………一夏…」

鈴が一夏にキスしようとしてた。やっべ、出てくタイミングしくつたなこりゃ。

あ、鈴がこっちに気づいた。顔真っ赤にして金魚みたいに口パクパクさせてやがる。おもしろ。

「ああ、すまん。続けてくれ。」

「続けるわけないでしょ！！」

そうか？別に続けりゃ良いのに。『その場に他人がいてもイチヤイチヤできるのが真の愛だ。』とかなんとかあのクソ親父がずいぶん昔に言ってた気がする。

「……………鈴？」

「っ！？」

「お、一夏起きてたのか」

「鈴の声で起きたんだよ。で、鈴どうしたんだ？なんか続けるとか

なんとか言ってたけど」

なるほど、キスしようとした場面ではまだ起きてなかったみたいだな。『続けるわけないでしょ!!』で起きたのか。

「な、なななんでもないわよ!! 焦ってもない! 勝手なこと言わないでよ、馬鹿!」

完全に焦ってる鈴と唐変木な一夏を見比べてニヤニヤしていたら鈴に『キッ!!』と睨まれた。顔に『余計なことは言うなよ』と書いてある。

ま、別にそんな野暮なことはもとよりする気も無い。そんなじゃあもうこの部屋を退散でもしようかね。

二人きりの鈴も良いだろうし。

「あー、オレはもう帰れるから部屋戻るわ。二人っきりで昔話でもどうぞー」

二人っきりで、を強調してニヤリと笑ってやると、鈴は面白いほどに顔を真っ赤にして黙った。んだがやっぱり一夏は意にもとめず『おう。じゃーなーレイ』とか手を振ってやがった。

はあ…いくら幼馴染とはいえちよつとくらい女の子として意識してやれよ…。

そんなことを思いながら廊下を歩いていると、今度はやけにうきうきした表情のセシリアとすれ違った。すれ違いざまに

「一夏さんはまだ保健室にいらっしゃいますの?」
って聞かれたから、

「おお、いるぞ?」

って言ったんだけど、しくったなあ……。鈴の二人きりが崩されるな
こりゃ。ご愁傷様。

side out

学園の地下、50メートル。

そこは、レベル4の権限の持った者しか入れない空間だった。

雑賀玲衣蘭によって壊された『全身装甲』。その解析が、そこでは
行われていた。

「織斑先生。あのISの解析結果が出ました。」

「続けてくれ。」

「あれは——無人機です。どのような方法で動いていたのかは解
りません。雑賀さんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れてしまっ
ています。修復は出来そうにありません。」

「そうか……。コアは？」

「それが…登録されていないコアでした。」

織斑千冬はやはりな、とつぶやく。その、妙に確信めいた返答に山
田麻耶は怪訝そうな顔を浮かべる。

「なにか心当たりが……？」

「いや、無い。今はまだ——な」

そういつてモニターに浮かぶ映像に再び向けられたその視線は、教師としてのものではなく——かつて世界最高位にあった、伝説の操縦者。その現役時代を彷彿させる、戦士としてのものだった——

side 玲衣蘭

寮につき、自らの部屋のドアに手をかける。思えば、この四肢に走る痛みの所為で、保健室からここまで来るのにも一苦労だった。

だがもうここまで来てしまえば、後はもうドアを開けてベッドに飛び込むだけだ。シャワーを浴びても良いかもしれない。

今日ばかりは本音にお菓子を作れとねだられても作ってやらない。自分だけの時間にするのだ。

そう決意し、ドアを開け自分の部屋に入ろうとした。

ガチャ

「お帰りなさい。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

ボタン。

どうした。何がおきたんだ今のは。いや、あんなことがあるはずな

い。あの人が――会長がこんなところにいるはずがない。しかも何故か下着の上にYシャツ一枚とか言う格好で。下を履け下を。ん？こんなところ？ここは――1026室。よかった。部屋を間違えていたわけじゃない。と、言うことはアレはオレが見た幻覚か。そうか、そこまで疲れていたんだなオレは。

よし、幻覚なら何も恐くない。会長がこんなところにいるはずないんだ。何へんな幻覚を見ているんだオレは。とっとと部屋に入ってベットに飛びこんでやろうじゃないか。そう思って再びドアノブに手をかける。

ガチャ

「お帰り♪私にします？私にします？それともわ・た・し？」

オレはその場に崩れ落ちた。



「んで、会長はなんでオレの部屋なんかに来てるんですか」

あの後紆余曲折あって会長に服を着せたり腹減ったと喚く本音に作っておいたプリンをあげて黙らせたり私も食べたいとかぬかす会長にプリンをあげてオレの分がなくなったり「わーれいちちゃんの匂いだー」とか言ってオレの貸した服の匂いを嗅いでた会長をどうしようか考えたり色々あったのだから一通り終わって落ち着いて今に至るわけだ。

「ん。これは真面目な話になるんだけどね？ れいちゃんあの『全身装甲』が無人機だって気づいてるでしょう？」

「ええ、まあそりゃあ」

気づいてなかったら最後にあんな攻撃できんわ。中の人までぶった切っちゃうし。

それでね、と会長が続ける。

「『無人機が存在した。』という事態に、学園関係者全員に緘口令がしかれることになったの」

ああ、なるほど。ISの遠隔操作と独立稼動。その技術はまだ世界のどこでも完成されていなかった筈のもの。その少なくとも片方、もしかしたら両方が使われているあのIS。それを世界に公表するわけにはいかないってことか。

「わかりました。他言はしません。で、それだけですか？」

そう。それだけなら別に本音からだって聞ける。別にわざわざ会長自ら来る必要はない。

「あと、クラス代表戦は中止になったわ。だから、私からの訓練も今日でおしまい。」

「…はい。わかりました」

予想は出来ていた。でも、この人からはもうちょっと学びたいこともあったから、惜しかったな。と思う。

と、言うことはオレは明日から一夏の護衛兼訓練相手になるのか。うおお…あいつらの視線が恐くなりそうだ。

でも、一回襲ってきたからしばらくはないだろう。今回のことでこれからしばらくはIS学園の警備は何倍もの厳しさになる。そんなときに襲ってくるなんて馬鹿とは思えない。

「まあ：あとは――」

まだ何かあるらしい。

心当たりなんてないんだが、何の話だろうか？

「れいちゃんが元気か心配で見に来ちゃった♪」

元気そうだなによりだわ。と言って、会長は――本当に嬉しそうに笑っていた。

この人はどうしてこんなに人の心を掴むのが上手いのか。こんな人だから周りから『お姉様』なんて呼ばれてんだろな…。

その所為でなんか会長と歩いてると最近

『はっ：！？会長×副会長：！』『副会長はツンデレ受け』『今度の薄い本はいつも振り回されてる副会長が頑張って主導権握ろうとするけど結局会長が主導権握っちゃうって話ね：！』『『買ったあ！：！』『』

とかいう会話を聞くことになったんだ…。いや、アレはもう生徒会やめようかと思っただねマジで。最近とか『楯無×玲衣蘭×男体化合同』とかいう本をふらりとよった漫研に置いてあったときかもう…ね。うん。

ってかオレってどうやっても受けなんだ…。い、いやそんなん関係ないな。うん。

気を取り直して

「ああ、オレは元気ですよ。」

そう、答える。まあ、実は結構やせ我慢で？四肢が絶対防御効かないんでがつり今もズキンズキン来そうなのを我慢して平気な顔してるだけで――

「えいっ」

ばしっ

「いっ!!?」

あ

「もう、全然大丈夫じゃないじゃない。ちゃんと安静になさい」

「じゃあ…叩かないで…ください…っ!」

あまりの激痛にうずくまって息も絶え絶えに答える。不意打ちだから我慢する気持ち出来てなかったからこんなになってしまった。

「このままじゃあ食堂に行くのも大変だろうし、今日は私がご飯を作ってあげたわ。食べる?」

「え…? 作っといってくれたんですか? あ、ありがとうございます」

そういって、テーブルを見ると今まで何で気づかなかったのかと思うほどに立派な食事が置いてあった。

和食だ。うん、和食だ。でも、なんで。

「なんで、伊勢海老とかあわびのバター焼きとかあるんですか?」

「作ったもの♪」

『作ったもの』じゃないっ!! ってか作ったのかコレ!? なんか料

亭に出てきそうなあのミニ鉄板見たいのとかあるんだけど!？舐めてた。この人を舐めてたよオレは。まさかこんなことまで出来るとは。

「…ま、ありがたくいただきます。」

そうして口にした晩御飯は、やっぱり美味しかった。ただ、自分で箸を使って食べたかったなあ。と思う。い、いや、別に会長に食べさせられたわけじゃないんだぞ!？ち、違うんだからな!？

会長は、オレが晩御飯を食べ終わると（会長が食べさせ終わると）、「じゃあ、明日から織斑くんの護衛と訓練、よろしくね♪」と言って帰っていった。

そういえば、オレあの人の部屋知らないな。いや、知らなくとも不便はないんだけど。

あと、本音はプリンを食べた後に購買までお菓子を買いに行った。「最近はいれいのお菓子ばかり食べてたから久しぶりにー」とのこと。

オレは今日も疲れたから、シャワーに入って痛む体をそーっと洗った。いつもみたいにすごしすると絶対に痛い。

シャワーからあがると、本音は既に帰ってきていた。ついでに食堂でご飯も食べてきたみたいだ。まあ、今日はオレも作る気力ないしな。あいつが自分で作るとか天地がひっくり返ってもありえん。

さて着替えるか、と思い自分の筆筒の元へ。オレの今の状態はタオルを巻いてるだけだ。

と、そこでコンコン。とノックをされる。

「おー、本音。対応よろしく」

「らじゃー」

普段ならオレが出るのだが、流石にこの格好で出るわけにもいかない。

本音に対応をまかせて、オレは着替え始めた。

「おーよくきたねー。さ、あがってあがってー！レイレイはそこだよー」

「お、おう。」

いや、まて本音。まさかお前――

「レイ、聞きたいことがあるんだけどレイって生徒会に――」

一夏が部屋に入ってきて下着姿のオレとがつつり目が合う。

一夏は固まっている。ま、とりあえず

「出てけ」

「ご、ゴメンっ！！」

ドアの開閉音が二回連続で聞こえた。自分の部屋にダッシュで逃げたか一夏。ってかオレにも適用するのかあいつのラノベの主人公っぽい感じは。

それよりもなによりも

「おい、本音。オレ着替えてたんだけど」

「えへへー」

「はあ……」

本音の能天気さに頭を抱えていると、しばらくしてから

「わ、私が優勝したら——付き合ってもらおう!!」

と隣の部屋から聞こえてきた。

おお、箒が攻めに行ったぞ。優勝したらってことは、今度の学年別個人トーナメントか。

でもな、箒。多分一夏は『買い物に付き合う』くらいにしか受け取ってくれないからな？なんってーか、その…ドンマイ。

本音にキャメルクラッチを食らわせながら、そんなことを思っていた。

因みに、一夏はその日オレの部屋に尋ねてくることはなかった。

どうしたんだ？アイツ。何か聞きたいことあったっぽいのに、いいのかね？ま、本人が忘れる程度のことだし、別にいいだろ。

十三話（後書き）

一夏は玲衣蘭の下着姿を見たのと、箒に言われたことで完璧に質問の内容とか疑問とかがぶっ飛んでしまったってことで。

いや、レイちゃんは下着姿を見られても殴ったりしませんよ。絶対零度の目で見ただけで↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8096r/>

IS～力は何のために～

2011年5月21日21時13分発行